

自己点検・評価表

平成 21 年度

新潟薬科大学薬学部

平成21年度 教育職員一覧表

教室／施設	教授	ページ	准教授	ページ	講師	ページ	助教	ページ	助手	ページ
学部長（まえばき）	北川 幸己	－								
薬化学	杉原 多公通	1	本澤 忍	51						
薬品製造学	北川 幸己	6					浅田 真一	101	関川 由美	117
生薬学	渋谷 雅明	*					関谷 倫子	※		
薬理学	長友 孝文	※	土橋 洋史	53					大貫 敏男	119
臨床薬理学	渡辺 賢一	10							張馬 梅蕾	123
毒物学	尾崎 昌宣	13								
薬剤学			鍋倉 智裕	56						
			飯村 菜穂子	60						
臨床薬剤学	河野 健治	17							笹木 睦子	126
臨床薬物治療学	若林 広行	18							神田 循吉	128
臨床薬学	影向 範昭	21	朝倉 俊成	64			阿部 学	*	影山 美穂	130
							齋藤 幹央	*		
薬品物理化学			星名 賢之助	68					柘植 雅士	133
薬品分析化学	大和 進	25	田辺 顕子	71			中川 沙織	105		
生化学	小宮山 忠純	28	皆川 信子	74					宮本 昌彦	135
微生物学	中村 辰之介	31	福原 正博	77			山口 利男	107		
衛生化学			安藤 昌幸	81						
公衆衛生学			酒巻 利行	84			佐藤 浩二	111		
薬物動態学	上野 和行	34					福本 恭子	113		
物理学	大野 智	40							田原 周太	137
英語					武久 智一	99				
基礎化学			高津 徳行	88						
数学			本多 政宣	91						
生物学			白崎 仁	93						
保健体育	高橋 努	42								
高度薬剤師教育研究センター			高中 紘一郎	96						
薬学教育研究センター	佐々木 正憲	44								
	藤原 英俊	46								

※定年退職・転出・出向などにより提出されていない。

*着任から間もないため提出されていない。

委員会	ページ
将来計画委員会・予算委員会	139
自己点検・評価委員会	141
FD委員会	143
教務委員会	145
学生委員会	148
入試委員会	151
国試委員会	153
就職委員会	155
図書委員会	157
機器委員会	159
国際交流委員会	160
臨床実務教育委員会	161
サイバーキャンパス推進委員会	163
防災・環境委員会	166
公開講座委員会	167
共用試験対策委員会	168
C B T 委員会	170
薬学教育研究センター	173
高度薬剤師教育研究センター	175
薬用植物園運営委員会	177
遺伝子実験施設管理委員会	179
動物実験委員会	180
体育施設管理運営委員会	182
放射線安全管理委員会	183
R I 利用施設運営委員会	184
大学院入試委員会	185
産官学連携推進センター運営委員会	186
大学入試センター試験実施委員会	188
ホームページ委員会	190

プロジェクト	ページ
教育・学習方法改善支援事業	
教員の教育・研究活動向上のための外部評価制度の改善	191
教員による自己プレゼンテーションによる評価とFDの実施	192
効果的な理科・教養教育の充実・改善への取組み	194
高度コミュニケーション能力を持つ薬剤師の育成を目的とした教育プログラム	198
アクティブラーニング手法を用いたアドバンスト薬学教育プログラム	199
介護老人保健施設への早期体験実習および報告検討会	200
不自由体験を通じた医療人としての人間性涵養への取組み	202
時間外開館による学生の学習・外部利用者の生涯学習・研究支援と蔵書点検	203
効率的な学習を促す情報収集能力向上プログラム	204
地域共同研究支援	205

ま え が き

自己点検評価を通じた「教育力」と「研究力」の向上 ～大学の「ブランドイメージ」のアップに向けて～

平成 18 年度からスタートした 6 年制薬学教育ですが、平成 21 年度は CBT、OSCE といった初めての共用試験を迎えた節目の年でありました。また数年後の薬学教育評価機構による 6 年制薬学教育の第三者評価を控え、「自己評価 21」という形でここまでの本学の 6 年制薬学教育を検証する年でもありました。一方薬科大学を取り巻く状況は好転する兆しがないまま、5 年次の長期病院・薬局実務実習が始まりました。このような厳しい状況下ではありますが、これまで以上に魅力のある 6 年制教育プログラムを準備して、知識・技能・態度に優れた卒業生を薬剤師として社会に送り出すこと、同時に大学での研究成果をもとに医療や健康に関する学術・教育拠点として、地域社会に貢献していくことが本学薬学部の使命です。

薬学部では、平成 16 年度より教員および委員会活動の 1 年間の実績報告を自己点検・評価表として提出していただき、外部評価員の先生方に評価をしていただいています。こうした内部評価・外部評価を行いながら、各教員が絶えず自己点検を意識して教育・研究の改善に取組めば、必然的に「教育力」と「研究力」の向上に繋がります。幸い薬学部では、ICT を取り入れた種々の教育支援システムや卒後教育・研修のシステムが機能しており、医療系大学との連携教育といった新しい取組みも芽吹こうとしています。また、今後は 5、6 年次学生に依存することが大きくなりますが、基礎研究と臨床研究の融合といった形での研究活動が期待されています。

教員各自の工夫と努力で、こうした教育・研究基盤をさらに深みのあるものへと展開することができれば、本学薬学部の 6 年制教育の充実だけでなく、新潟薬科大学全体の活性化とブランドイメージの向上に繋がると確信しています。

平成 22 年 10 月

薬学部長

北 川 幸 己

自己点検・評価表

平成 2 1 年度 自己点検票

職名	教 授	氏名		大学院 担当	研究室等	
① 教育活動（業績）						
② 研究活動（業績）						
③ 委員会活動						
④ 社会的活動						
⑤ 担当授業・実習に関する点検・評価						
⑥ 教育・研究に対する提言						

委員会実績報告

平成 21 年度 委員会実績報告

委員会名	将来計画委員会 及び予算委員会
委員長（○印）及び委員氏名： （将来計画委員会）○北川幸己、杉原多公通、中村辰之介、尾崎昌宣、藤原英俊、河野健治、大野智 （予算委員会） ○北川幸己、杉原多公通、中村辰之介、尾崎昌宣、河野健治、大野智、長友孝文	
年間の活動： 将来計画委員会は、定例の教授会開催前に開催した。 （１）教授会で提案される主な議題に関して、意見の集約を目的とした意見交換を行った。 （２）本委員会で協議した事項 １．「薬学部教育連携推進センター」の設置について：各種の教育連携プロジェクト（SSH や SPP などの高大連携講座、理科教育支援プロジェクト、医療系大学合同セミナーなど）を統括していく部署がないことから、「教育連携推進センター」の設置を協議し、教授会、部局長会で提案し承認された。同センターは、平成 22 年度から発足した。 ２．研究室の整備に関して： ① 研究室名の変更：「臨床薬剤治療学」を「臨床薬物治療学」へ研究室名を変更すること。 ② 臨床講義棟（C 棟）が 21 年 10 月に完成したことに伴い、一部研究室の移転後の F 棟研究室（薬品物理化学、公衆衛生学、薬効安全性学、生物学）の配置を協議した。 ③ 生薬学、衛生化学、生化学の各研究室の教員配置について協議し、それぞれ教員 3 人で研究室体制を確認した。 ３．常置委員会委員長の選出方法について：部局長会で提出された「新潟薬科大学委員会等設置に関する規則」の改正に伴う常置委員会委員長の選出方法に関して協議した。新規則案で示されている学部長が前委員長と協議のうえ指名して選出する方法を了承した。 ４．委員会の統合について：2 つの学部でそれぞれ設置している委員会を、大学の委員会として機能させることを目的とした委員会統合案が部局長会で協議されていることから、関連する事案として施設長（センター長）の研究費に関する協議を行った。	
問題点の提起： ● 本委員会の前身が学科主任会議であったことから、教授会開催前の打ち合わせ会の色合いが濃いのはある程度仕方がない部分がある。しかし、将来計画委員会の本来のあり方を考えたとき、このままの委員会運営は望ましくない。委員会の改選時でもあることから、平成 21 年度最後の委員会で、本委員会の機能分離を学部長が次のように提案し、承認を得た。 ① 教授会打ち合わせは、学部長と事務部長代理および各課長でおこなう。 ② 主要委員会の委員長で構成するのではなく、若手教員を含めた委員（学部長を含めて 5 名＋事務部長代理）で構成し、薬学部に関する実質的な将来計画を協議する委員会とする。	

- 前年度の自己点検・評価表で、将来計画委員会の中で予算に関する協議を行った方が望ましいことを記載した。平成 22 年度の予算編成の過程で、学長・学部長による予算編成 WG が学長裁定で編成され、各委員会から提出された予算申請に対しヒアリングが実施された。厳しい状況下にある予算編成であり、こうした手法も止むを得ないと考えるが、全学的な委員会統合といった状況もあって、新年度以降に一部混乱が生じたことも事実である。ヒアリングの実施前に、学部の委員会から出された予算申請については、学部としての対応を協議しておく必要性を感じる。
- 予算編成に関連して、薬学部単独の単科大学時代の慣例がまだ残っている部分がある。次年度に向けて、解消していくように努めたい。

平成21年度 委員会実績報告

委員会名	自己点検・評価委員会
委員長（○印）及び委員氏名： ○北川 幸己、長友 孝文、杉原 多公通、上野 和行、田辺 顕子、鍋倉 智裕、山口 利男、鈴木 正利（事務部長代理）	
年間の活動： 1. 学生による授業評価アンケートの実施 学期末に授業評価アンケートを全教科（実習を含む）で実施した。14項目について点数化して順位化した評価一覧表（学年ごと）を作成し、教授会で公開した。また学生に対しても、学生用掲示板で公開した。学生から寄せられた授業に対する要望やコメントは、担当教員に伝達した。 2. 平成20年度自己点検・評価表の作成 平成20年度における各教員の教育・研究活動について、自己点検・評価表の提出を依頼した。同時に薬学部各委員会の活動状況の自己点検・評価と、学内・学部内で進行しているプロジェクトについて活動・進捗状況の報告を依頼し、これらを平成21年10月に冊子としてまとめた。 3. 平成21年度外部評価の実施 日時：平成22年2月23日（火） 14:00～ 場所：臨床大講義室（CB-201）およびカフェテリア 外部評価委員： 廣部 雅昭先生（静岡県学術教育政策顧問） 松木 則夫先生（東京大学薬学研究科教授） 本多 利雄先生（星薬科大学教授） 第1部：パネルディスカッション「本学薬学部の現状と将来への展望」 ～主要な委員会からのプレゼンテーションと総合討論～ 第2部：ポスター掲示による各研究室の研究・教育に関する取組紹介 平成20年度自己点検・評価表に基づいて、各教員の研究・教育活動、及び各委員会の活動状況に関して評価を受けた。また、上記の日程で外部評価委員に来学いただき、本学薬学部の現状について、全教員が参加する方式でパネルディスカッションを行った。この外部評価については、「平成21年度 外部評価委員による新潟薬科大学薬学部自己点検・評価表」として、平成22年6月に冊子としてまとめた。 4. 学内競争的教育・研究助成の実施 学内教員に対して教育・研究助成を行った（総額500万円）。自己点検・評価表、学生による授業評価アンケート、外部評価委員による教員の個人評価、申請書に対する審査委員の評価等を点数化して、職位ごとに順位を付けて選考した。教育区分で申請があった1件、研究区分で申請があった17件に対し、15万円～30万円を助成した。なお、本学卒業生から寄付があった奨学金（50万円）を、助教（2名）と助手（1名）に加算して配分した。本助成に関しては、平成22年6月に報告書を冊子としてまとめた。	

5. 薬学教育評価機構「自己評価 21」の実施

平成 18 年度からスタートした本学の 6 年制薬学教育に関して、薬学教育評価機構が設定した 12 項目 62 基準について自己点検・評価を行った。この「自己評価 21」の実施にあたっては、各基準に該当する委員会に自己点検・評価を依頼し、最終的に本委員会が報告書をまとめた。本報告書を平成 22 年 4 月に薬学教育評価機構に提出するとともに、本学 HP を通じて外部公開した。

問題点の提起：

1. 本年度の外部評価は従来とはスタイルを変えて実施した。主要な委員会の委員長が委員会での取組み報告をプレゼンテーションしたのち、問題点の改善に向けた意見交換を外部評価委員と薬学部全教員で行った。丁度各委員会の委員長が任期満了となる時期でもあったことから、2 年あるいは 4 年間の委員会活動を総括的に報告していただくことになったが、全教員が参加するオープン形式であったことから、教員の FD としても良い試みであった。
2. 今回の外部評価と「自己評価 21」をまとめた 2 冊の冊子は、これからの本学薬学部の進むべき道を示した資料である。また、各教員が大学を良くするにはどのようなアクションを起こせばよいかを考える資料でもある。各教員が「教育力」および「研究力」の両面に一層の研鑽をすることで、薬学部全体、大学全体へのレベルアップに繋げるために、常に手元において「振り返り」の資料としてほしい。
3. 外部評価で指摘された項目、さらに「自己評価 21」の自己点検・評価の過程で抽出されてきた項目を、短期・中期・長期での改善計画として整理し、改善を実行していく。

平成 21 年度 委員会実績報告

委員会名	FD 委員会
委員長（○印）及び委員氏名： ○上野和行、大和進	
年間の活動： FD 活動の一環として「教員による自己プレゼンテーションによる評価と FD の実施」を行った。その活動報告は以下の通りである。 平成 21 年度は教員の自己プレゼンテーションによる評価と FD の実施に関しては年度末の 3 月に実施した。主に教育における自身の考え方（授業、試験、実習、また配属学生など）、取り組みなどの紹介、また研究に関する取り組みなどを熱く語ってもらった。同時に参加教員（約 30 名）との討論を実施した。教員 1 名あたりプレゼンテーション 30 分、討論 10 分で実施した。その詳細は以下に示す。 1 6 年制薬学部教育と研究への取り組み in F506b 2 「大学の自治」と「理事会」 3 3 年間の FD 活動報告と教育・研究の今後 本プレゼンテーションにて他の教員の考え方などが理解でき、自身の FD に役立つという意見があった。また 3 年間の活動報告と過去のプレゼンテーションの評価としてのアンケート調査などを整理し、発表された。 講演後の討論でも種々の意見が交わされ、有意義な講演であった。本講演会を通じて FD について色々討論できたと考える。 尚、本プロジェクトにおける 3 年間の活動報告を作成した。 一方、FD 委員会として、 ①外部評価時にける各研究室の研究活動などの取り組みを発表下が、FD 活動の一環として記録をとった。 ②病院薬局訪問説明会に対する取り組みなどをビデオ撮影することで、教員全員が理解できるように FD 活動の一環としてビデオ撮影などを実施した。 ③助手から助教に昇任時に教員のプレゼンテーションが実施されるが、全教員がそれを見ることができるよう FGD 活動の一環としてビデオ撮影して、参加できなかった教員への支援とした。	

問題点の提起：

今後はFD活動の一環として、外部の講師によるFD活動に関する考え方の紹介や、外部のFD活動の紹介などをしてもらいたい。

また教員全員のFDに対するモチベーションを上げるべく、今後も「教員による自己プレゼンテーションによる評価とFDの実施」を展開できればと考える。

平成 21 年度 委員会実績報告

委員会名	教務委員会
委員長（○印）及び委員氏名： ○杉原多公通・渡邊賢一・小宮山忠純・朝倉俊成・星名賢之助・福原正博・武久智一 佐藤浩二・（オブザーバー：生野昭雄・神田優作）	
年間の活動： ① 教務関連スケジュールの作成・運営 ② オリエンテーションにおける学生への説明（教務関連事項） ③ 保護者会における本学部カリキュラムと独自の教育に対する取組みの説明 ④ 学生の成績チェック・進級判定 ⑤ 研究室配属の決定 ⑥ 著作権に関する説明会の開催 ⑦ 卒業論文のリポジトリ収載 ⑧ 学年総括試験の運用 ⑨ 転学部試験の運用 ⑩ 高大連携『医療・薬学』講座の開講と科目等履修生としての単位認定 ⑪ 専門職間連携教育学生セミナーの開催 従来から教務委員会が担当していた業務①～⑤に加え、昨年度末から始めた⑨、さらに今後業務として加える⑥～⑧を今年度から開始した。また前年度と同様に、高校における教育と大学における教育をシームレスにつなぐことを目的とした⑩を行った。さらに、6 年制薬学生を対象とした授業のトライアルとして、大学院生有志を対象とした⑪を行った。⑩と⑪の業務は準備等の業務が煩雑なことから教務委員会の業務から分けるのが望ましく、本業務に専従する新組織として『教育連携推進センター』の設立を提案した。 ※〔⑥および⑦について〕 今年度、6 年制薬学教育を受ける最初の学年が 4 年生に進級した。本学のカリキュラムでは 3～4 年次に開講する「卒業研究Ⅰ」と 5～6 年次に開講する「卒業研究Ⅱ」の二つの卒業研究を行う。「卒業研究Ⅰ」はあるテーマに基づいて文献を調査し総説（論文）にまとめるものであり、また、「卒業研究Ⅱ」はあるテーマに関するウェットまたはドライのベンチワークやフィールドワークを行った結果を論文にまとめると同時に口頭あるいはポスター発表することを指針としている。今年度、本学開学以来初めてとなる卒業論文の提出を学生に求めてゆくが、総説を作成するに当たり「どの程度までオリジナルの論文を引用または模しても良いのか」、「どこまでは良くて、どこからは著作権に抵触するのか」等、指導する教員や論文を作成する学生に対して著作権に関する理解を深めてもらう必要がある。教員に対しては前々年度からサイバーキャンパス推進委員会が主導して「教育著作権セミナー」を開講してきたが、学生に対する指導はこれまで全く行っていない。そこで、今年度開始早々のオリエンテーション時に 4 年生を対象とした「著作権	

に関する説明会」を行い、学生の理解を深める試みを行った。コピーを汎用している学生にとって「この文章はコピーしたり、訳を載せてはダメ。著作権に抵触する」という点は新鮮だったようで、「もう少し詳しく知りたい」という声も聞かれた。教員からの質問が多々あるように、「これが著作権に抵触するライン」を口頭で学生に説明してもなかなか伝わらないことから、今後演習方式による著作権セミナーの開講を検討した方が良いかもしれない。

近年、大学をはじめとする図書館に収載されている知的財産をデジタル化し、社会に向けて公開する試みが精力的に行われている。学生の著作物である卒業論文は大学にとって大きな知的財産であり、今後毎年約 400 編提出される卒業論文をデジタル化して管理できれば、図書館の省スペースにつながるばかりか、公開を通じた社会貢献もしやすくなる。このような考えから、卒業論文（総説）は、審査時には書面での提出を義務付けたが、最終完成版は従来型の書面ではなくデジタルファイルとして提出することを義務付けた。同時に、「著作物使用許諾書」の提出も求め、今後の公開に向けた準備を整えた。集めた卒業論文は図書館が管理するリポジトリ・サーバーに収載し、公開に向けた準備を行っている。「著作物使用許諾書」の内容の精査、書類の作成に関しては本学事務部庶務課の多大なる助力を得た。ここに感謝する。

※ [⑨について]

学生に対して入学後も修学に関する選択肢をより多く提示する目的で導入した転学部試験は 2 年目を迎えた。薬学部から応用生命科学部への転学部と応用生命科学部から薬学部への転学部の可否を諮る両試験を 3 月後半に開催し、

薬学部 2 年生 (3 月) => 応用生命科学部 2 年生 (4 月) 3 名受験 3 名合格

応用生命科学部 1 年生 (3 月) => 薬学部 1 年生 (4 月) 2 名受験 1 名合格

計 5 名の受験生があり、4 名が合格した。

昨年度、応用生命科学部 1 年生 (3 月) から薬学部 1 年生 (4 月) へ転入した学生 2 名は受験時から薬学への進学を志望していたが、結果的に試験で高得点を得られず併願していた応用生命科学部への入学を決めた学生であった。薬学で学ぶことを切望していたためか、転学部後も修学モチベーションは高い状態で維持されているようで、学年全体でみて中程度の成績を維持している。

※ [⑩について]

新潟南高校の申し出を受けて開講を始めた高大連携『医療・薬学』講座は 2 年目を迎えた。前年度は本学で開講している「薬学への招待Ⅰ」の内容に関する講義を行い、新潟南高校のみならず他の高校に所属する生徒も含め、主に高校 1、2 年生の参加があった。前年度の参加者が今年度も受講する可能性があることから、今年度は前年度との重複を避け、「薬学への招待Ⅱ」の内容に関する講義を行った。飯村准教授が代表して企画運営された SPP (Science Partnership Project) 事業と連携をとり、幾つかの講義・実習を同時開講して担当教員の負担を減らすように試みた。新潟南高校と本学で開講した 90 分 10 回の講義、3 日間の午後を使った実習に参加した高校生は延べ 148 名であったが、残念ながら所定の出席回数を満たし単位認定試験の受験資格を持つ生徒は皆無であった。ちなみに SPP 事業の方では、単位認定試験の受験資格を持つ生徒が 2 名おり、試験を受験後合格して単位を取得した。うち 1 名は本学に進学した。

新潟南高校とは事前に調整して高大連携講座の開講日程を決めたが、新潟で開催された国体の準備と夏期に行われた耐震工事の関係で、新潟南高校における週末のスケジュールが補講や模試等によって埋められてしまい、受講希望の生徒が必ずしも全ての回を受講できる状況になかった。これが今年度、単位認定試験の受験資格を持つ生徒がいなかった主な原因であり、残念である。

新潟南高校で開講する講座には、やはり他の高校の生徒が参加しにくいような雰囲気がある。今年度の SPP 事業と同様に本学で開講するか、あるいは市内の公民館のような公共の施設を借りて開講した方が参加者を集めやすいように思われる。この高大連携講座開講事業は、平成 22 年度に新設された『教育連携推進センター』の業務に移管されることから、センターにおける検討を望む。

※ [⑪について]

新潟県の大学・短期大学が共同して進めている文部科学省の戦略的大学連携支援事業「共生型大学連携による新潟県の人材確保・養成の短期的及び包括的施策による地域貢献」の一環として、保健・医療・福祉に携わる人材を輩出している大学・短期大学が連携し、在宅チーム医療を題材とした専門職間連携教育学生セミナーを開催した。専門職間連携教育は千葉大学をはじめとする幾つかの大学で積極的に取り組んでいるが、ほとんどの場合が病院内でのチーム医療を題材としたものであり、また、一大学内で他職種と連携を行うものである。今回の取り組みは在宅チーム医療を題材としたものである点、さらに、大学間の垣根を越えて連携教育を行っている点が先駆的である。

セミナーは各大学学部の学生が入り乱れて模擬医療チームを作り、実際の患者の症例を検討し、患者の QOL の向上をはかるような医療を提案・発表する形式で進められる。1 日目にアイスブレイキングと症例の検討、問題点の炙り出しを行い、2 日目に患者、医師、メディカルスタッフへのインタビュー、3 日目に SGD を通して患者の QOL の向上をはかるような医療をまとめ、発表、専門家による講評の順に進められる。

セミナー参加者は臨床実習経験があることが望ましいが、6 年制の学生は未だ実務実習を行っていない。そこで、今年度はトライアルを兼ねて大学院生有志 9 名を募りセミナーに参加した。薬学以外の専門を学んでいる学生は最終学年にもなると臨床に則した実践的な内容を身につけている。医薬品に関する通り一遍のことしか学んでいない本学の学生にとってはある意味カルチャーショックだったようである。

患者や医師、メディカルスタッフへの説明と協力依頼、セミナーの題材として適した症例の抽出、訪問やインタビュー日時の調整と専門家への参加依頼等々、準備が大変なことから、教務委員会の手を離れ、担当する部署を構築することが望ましい。願わくば、実務経験の豊富な臨床系教員に主導していただきたい。

問題点の提起：

※「21 世紀が求める優れた薬剤師の育成」という本学の教育目標をよりわかりやすいものへと見直すのと共に、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーの中身に関する議論を始める必要がある。

※学生も教員も過密なカリキュラムに疲弊していることから、カリキュラムのスリム化と上記ポリシーに則したものの改変が必要である。

※臨床系教育は実務経験のある臨床薬学研究室が担当して行うべきである。講義以外の臨床系教育を行う度に基礎系教員が駆り出される現状は、基礎系教員の負担を激増させる主因となっている。教育の役割分担を明確にし、進める必要がある。

平成21年度 委員会実績報告

委員会名	薬学部 学生 委員会
委員長（○印）及び委員氏名：	
○ 尾崎 昌宣、高橋 努、白崎 仁、本澤 忍、福原 正博、 飯村 菜穂子、浅田 真一、中川 沙織	
年間の活動：	
学生委員会では、学生のかかわる各種大学行事に関することなど、学生生活全般に関することについて管轄している。また、学生の福利厚生を中心に、キャンパス内施設の充実及び通学路の安全確保を目的として、平成21年度においては、下記の整備を実施した。 また、応用生命科学部と共通の案件については、相互連絡をとり学生部に懸案して運営している。	
1. 大学行事 4月：入学式、オリエンテーション、新入生歓迎会、卒業アルバム作成指導 5月：保護者面談会（春期）、学友会・サークル代表者会議 6月：五頭薬用植物園見学、球技大会、 7月：卒業延期学生卒業記念パーティー 10月：新薬祭、保護者面談会（秋期） 3月：スキー&スノーボードスクール 3月：卒業式、卒業記念パーティー	
2. 学生の福利厚生、キャンパス内施設及び通学路等の整備 （1）学生等の意見を聴取するための意見箱「ひとことBOX」の回答 （2）通学路への安全施設設置及び区画線維持管理 ①道路減速表示 ②優先道路区画線表示 ③自転車ストップマーク及び自動発光道路鋲 （3）カフェテリアの充実 （4）「学友会規定」作定および学生へのアドバイス （5）「学友会サークル規定」の制定および学生へのアドバイス （6）アドバイザー活動アンケート用紙作成と実施・集計 （7）アドバイザー制度Q&A資料の作成	

- (8) 学生事故等への対応
- (9) 日本学生支援機構研修会「全国大学メンタルヘルス研究協議会」への参加
- (10) 防犯カメラの設置
- (11) その他：購買、食堂（夕食の提供）、ロッカーの必要性など関係部署への申し入れ
- (12) 障がい者受入れ整備調査と状況把握

3. 学生委員会責任事項

学生名簿・卒業生名簿・アドバイザー名簿の維持管理、駐車場・奨学金の決定、卒業記念アルバム、後援会・薬樹会・学友会・学生部運営委員会、体育施設・開放用具・駐車輪場管理運営、地域住民との会合、私立薬科大学学生部長会・全国学生厚生補導研究会・全国学生相談研究会等学生福利厚生に関する会合・研修会出席、新潟薬科大学自己点検評価報告書（十一、学生生活への配慮）の作成、学生便覧（学生生活の項担当）作成

問題点の提起：

学生委員会は、新潟薬科大学薬学部の学生が、本学在学中に十分な充実感・達成感を得られるように、学生生活を多角的にサポートする組織であり、学友会、クラス代表者、サークル代表者、周辺地域住民などとの話し合いを持ちながら、より良い学生生活支援策を検討・実践している。

上記の日常的の継続活動に加え、本年度は、以下の活動を実施した。

新たな活動としては、昨年度から、一人のアドバイザー教員が1～3学年の各学年の学生の相談・助言に当たるという「縦割り」形式に変更し、同一アドバイザー教員が1年生から3年間続けて相談・助言に当たるというシステムを導入した。本年度は、その検証のひとつとして学生にアドバイザー活動についてのアンケートを行った。その結果、①教員に対する印象は、1年生では好印象であるが、2年生以上ではマイナスイメージを持つものが2倍増加していた。②アドバイザー活動状況は、コンパの割合が高い。4年生では成績配付時の勉強指導と日常の勉強指導の希望が多い。しかし、各学年とも少数だがアドバイザー活動を行っていない場合がある。③1年生ではコンパ参加割合が低い、学年の進行に伴いほとんどの学生が参加を経験している。1年生は、コンパの回数を増やしてほしい意見が多数あったが、少数ながら参加を希望しない学生がいる。不参加理由は、アルバイトなどで日程の都合がつかなかったことが原因であったが、参加意識の醸成には注意をしていきたい。④補助金が出ることを知らない学生が多数おり、オリエンテーションにおいてその意義を説明することが必要である。⑤忙しいことや不在の時間が多く相談できない等理由でアドバイザー活動を実施しない教員がいる。アドバイザー活動に対する意識が低いように思われる教員に対して活動実施に向けた啓発をしていきたい。

一方、学生の日常生活・勉強増進をはかるための保護者面談会は、これまで保護者の意見を聴く機会がなかったので、出席保護者にたいしてアンケートを実施した。その結果、開催日時については学年を通じて93%以上、内容については、89%以上が適であった。個人面談についても83%以上から適との回答をえた。それぞれの要望事項については各担当委員会に回答を依頼し、保護者に送付した。学生委員会関連の要望事項では、学生の話も直接聞けると良い、保護者面談会の他県開催、安い夕食の提供、カフェテリアでの味の改善、駐車場の整備・警備、成績優秀者への奨学金の増額、保護者会の年数回の開催、学年毎に分けての様々なテーマでの実施などであ

ったが、これらの結果や問題点を基に来年度の面談会に活かしていきたい。

今年度流行したインフルエンザに関しては、両学部合わせて 132 名（4 月から 2 月まで）が感染したが軽症にとどまり不幸中の幸いであった。「インフルエンザ感染症登校許可証明書」及び「感染症罹患状況調査書（聞き取り用）」を作成し、ホームページに掲載したが、日頃からの準備の必要性を感じこの経験を活かして行きたい。

来年度は、意見箱「ひとこと BOX」設置 1 年を経過するが、質問・回答を開示し設置の教育的意義を含め有効活用したい。この中で多かった学生カフェテリアおよび購買部についての要望や意見を集約し、改善・充実をはかる必要がある。また、特に試験期間における夕食、車での移動販売、学内自動販売機などの充実をはかることも必要である。さらに駐車ゲートの設置や駐車環境の改善を目指し、学生の通学における交通マナーを良くする啓蒙活動や、地域との良い関係を築く働きかけを推進する。

また、禁煙・喫煙問題と過剰飲酒についての注意も繰り返し必要であろう。このような、違反、事故等が発生した場合、学生委員が授業前に「注意喚起」などの啓蒙活動を行っていくこととした。また、大学周辺道路への街灯の設置をさらに推進する。

上記の課題だけではなく、日常の出来事に対して、広く学生の意見・要望を聴取し、常に最適な学生支援策を打ち出し、これからの活動を学生部とともに進めていきたい。

平成 21 年度 委員会実績報告

委員会名	入 試 委員会
委員長（○印）及び委員氏名： ○中村辰之介、本多政宣、大野智、高中紘一郎、田辺顕子、酒巻利行、鍋倉智裕、星名賢之助	
年間の活動： 入試業務は基本的に平成 21 年度入試と同様に、応用生命科学部との合同入試の形式で実施した。 推薦入試、一般入試Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期、センター試験入試 A 日程、B 日程を行い 182 名が入学した。182 名中、学士入学生が 3 名いたが皆 2 年生に編入したので、新 1 年生は 179 名となり、定員より 1 名少なかった。 平成 22 年度入試から学費減免試験を導入した。 これまでは、一般入試Ⅰ期で上位 50 位まで施設設備費の半期 45 万円を減免するとしていた学費の減免を拡充した。一般入試(Ⅰ期)と同じ日時に、同じ会場で同じ試験を用いて行うもので、一般入試(Ⅰ期)受験者は自動的に学費減免試験に組み込まれる。学費減免試験は、推薦入試の合格者も希望すれば、新潟薬科大学において受験することができ、その場合、学費減免試験の受験料は徴収しない。学費減免試験の成績上位 25 位までにいった者は、入学初年度の授業料と施設設備資金の合計 210 万円を全額免除する。成績上位 25 位に達しない者から上位 75 位までの者は、入学初年度の施設設備資金の半期分 45 万円を免除するという制度である。この制度の導入により、一般入試受験生の高校のレベルがあがり、入学手続き率がおおよそ 1.43 倍（昨年度 25 名中 7 名入学、今年度は 10 名入学）に上昇した。成績が上位の学生のため、国立大学に合格する学生が多く、結果的には入学する学生の割合は平成 21 年度入試と大差はなかった。学費減免試験の成績が 75 位に達しない学生の手続き率が悪くなる傾向が見られた。推薦入学した学生のおおよそ 78% の学生が学費減免試験を受けて、6 人が 45 万円の減免を受けることとなり、推薦入学した学生の勉強意欲の維持に役だったと考えられる。 志願者数の推移 志願者数の推移を検証すると、 平成 22 年度 528 名、平成 21 年度 570 名、平成 20 年度は 696 名、平成 19 年度は 811 名 平均倍率は、平成 22 年度 1.3 倍、平成 21 年度 1.3 倍、平成 20 年度 1.4 倍、平成 19 年度 1.2 倍	

であった。

志願者数を新潟県内と新潟県外で比較すると

新潟県内：平成 22 年度 360 名、平成 21 年度 362 名、平成 20 年度 374 名、平成 19 年度 372 名

新潟県外：平成 22 年度 168 名、平成 21 年度 208 名、平成 20 年度 322 名、平成 19 年度 439 名
で、新潟県外からの志願者の減少傾向が続いている。

オープンキャンパスへの参加者の累計(薬学と応用)は、平成 22 年度は 643 名、平成 21 年度は 647 名、平成 20 年度は 710 名、平成 19 年度は 644 名、平成 18 年度は 550 名であった。薬学への参加者は、平成 22 年度は 293 名、平成 21 年度は 255 名、平成 20 年度は 297 名、平成 19 年度は 306 名、平成 18 年度は 287 名であった。

平成 20 年度の高校 3 年生の参加者(薬学)は 163 名で、その内の 82 名が入学してくれたが、平成 21 年度の高校 3 年生の参加者(薬学)は 116 名で、その内の 58 名が入学してくれた。

始めて大学センター試験の会場となり 449 名の受験生を受け入れ、無事に遂行した。

問題点の提起：

このまま受験生数の減少が続くと、平成 23 年度の入学者数は定員を割ることが想定される。その事態を避けるために、できることは全て行う必要がある。

- 1) オープンキャンパスの宣伝・大学の宣伝
- 2) 「薬剤師になろう」キャンペーン（新潟県薬剤師会・新潟県病院薬剤師会からの協力）
- 3) 在校生・卒業生の力を宣伝に用いる（「熱いメッセージ」など）
- 4) 新潟薬科大学の教育プログラムの宣伝
- 5) 利子給付型奨学金・地域/企業奨学金の創設/導入
- 6) HP コンテンツの充実
- 7) 入試試験科目の変更・センター試験利用の促進・推薦入試会場の増設
- 8) 入試委員メンバーを手始めに、薬学教育と薬剤師の未来に対する Q and A 教育を行う。
- 9) 出張授業・見学者受け入れに力をいれる
- 10) さらなる奨学金の拡充・本当の奨学生制度の創設

入学した学生の勉学の意欲を維持させる教育プログラムの改善が必要で、6 年制薬学が完成後数年間における薬剤師国家試験の合格率が高い値であることが、受験生の確保に決定的に重要である。

平成 21 年度 委員会実績報告

委員会名	国試委員会
委員長（○印）及び委員氏名： ○藤原英俊、佐々木正憲、河野健治、尾崎昌宣、安藤昌幸、高津徳行	
年間の活動： 1 4 年生対象国試対策演習 演習の進め方、教科書の選定 演習予定表の作成 2 4 年次留年生対象 4 年次留年生は薬学教育研究センターと共同しておこなった。 卒業試験問題の作成（2 回分） 生活指導と卒業判定基準等 演習予定表の作成と演習方法の策定 3 卒業試験の合格判定基準を薬剤師国家試験と同じ 65%とした。 65%以下の学生の薬剤師国家試験合格者は数人であり、卒業までに修得しなければならない学力に達していないものと考えられる。卒業判定基準を 65%にすることは、以前からのテーマでありました。しかし、判定基準を 60%から 65%に引き上げた結果、留年生の数が増えると考えられる。そこで再試験を行い、多くの学生を卒業できるように致しました。その結果、例年と同じ留年生の数となりました。 4 既卒者対象 既卒者の国試合格率は一般的によくありません。対策その 1 は予備校に通学するように紹介を行った。その 2 は予備校に通わない学生には学習のモチベーションを上げ、それを維持するように、模擬試験問題を定期的に郵送配布しました。その結果、国家試験の合格率は非常に上がりました。	

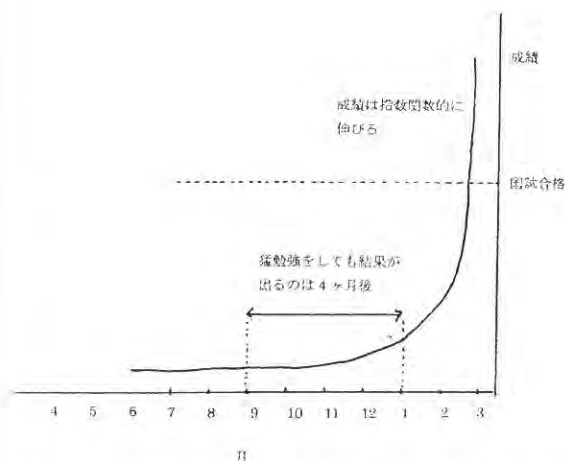
問題点の提起：

(1) 一般に勉強の成果は次の式に示すようにいろいろな要素が関係しています。

$$(\text{勉強の成果}) = (\text{教材} \cdot \text{教員の質}) \times (\text{集中力}) \times (\text{時間})^2 + (\text{過去の勉強の蓄積})$$

このことから、勉強の成果に最大の影響を与えるのは時間の因子であります。

また、成績が伸びてくるまでに 4 ヶ月ぐらいの期間が必要であります。これを図に致しますと下記の図とようになります。



図に示す通り国試の合格するためには 8 月以前から勉強を始めないと 3 月の薬剤師国試の合格に向けての成績の伸びが期待できないことになります。言い換えれば、9 月におけるプレテストは非常に重要である。このプレテストが国試合格の 70%以上を決定してしまいます。この問題を解決するには、教務委員会と国試委員会との学年歴等に関する連携が必要であります。

(2) 留年する学生は生活態度や勉強する姿勢に問題があります。これらは習慣であり、この習慣を少しでも是正するには 1 日 1 回、彼らと顔を合わせて会話をするようにつとめなければなりません。これを考えると彼らの近くにいる薬学教育研究センターの専任教員が担当しなければなりません。現在、評価委員の先生方の提言にありますように薬学教育研究センター長が国試委員長を兼任しており、また、薬学教育研究センターの教員が国試委員を兼任していることはよい方向であり、今後、このような体制が継続されるかどうかの問題になると考えています。しかし、平成 22 年度では、委員長は兼任はなくなりました。

(3) 既卒者で国家試験不合格になっている卒業生に対する大学としての義務の 1 つと考えまして、既卒者対策で模擬試験の送付を行い、既卒者のモチベーションを持たせました。国試に合格した卒業生からは感謝の手紙が来ております。

平成 21 年度 委員会実績報告

委員会名	就職委員会
委員長（○印）及び委員氏名：	
○若林広行、土橋洋史、福原正博、飯村菜穂子	
年間の活動：	
(1) 新学期開始のオリエンテーションで就職関連全般について説明 これまでの求人数・就職率・主な就職先、就職関連資料の閲覧、年間の就職支援の内容や平成 22 年度から運用を開始する臨床実務実習中における就職支援システム（長期実習中の学生が学外から PC あるいは携帯電話で随時求人情報、会社説明会などの最新の情報を入手できる）の利用方法などを説明	
(2) 1 年次学生対象 キャリアガイダンス 日時：平成 21 年 6 月 27 日 会場：J201 大講義室 内容：職種研究、OB・OG（6 名）による何でも相談	
(3) 3 年次学生対象 キャリアガイダンス 日時：平成 21 年 7 月 4 日 会場：J201 大講義室 内容：職種研究と自己分析、医療人のためのマナー講座 OB・OG（8 名）によるパネルディスカッションと懇談	
(4) 2 年次学生対象 キャリアガイダンス 日時：平成 21 年 10 月 17 日 会場：臨床大講義室 内容：医療人のためのマナー講座（電話応対と敬語の使い方） OB・OG（9 名）によるパネルディスカッションと懇談	
(5) 卒業生との交流フェスタ in 新潟 日時：平成 21 年 10 月 17 日 会場：臨床大講義室 内容：卒業生と病院・薬局・企業の人担当者を対象として本学の教学の現状説明 ならびに在校生情報を開示・説明	
(6) 1 年次学生対象 キャリアガイダンス 日時：平成 22 年 2 月 5 日 会場：臨床大講義室 内容：職種研究、医療人のためのマナー講座（挨拶のしかたと敬語の使い方）	
(7) 3 年次学生対象 キャリアガイダンス 日時：平成 22 年 3 月 6 日 会場：J201 大講義室 内容：OB・OG（11 名）によるパネルディスカッションと懇談	

(8) 卒業生との交流フェスタ in 東京

日時：平成22年3月14日

会場：アルカディア市ヶ谷（東京都千代田区）

内容：卒業生と関東地区の病院・薬局・企業の人担当者を対象として本学の教学の現状説明ならびに在校生情報を開示・説明、就職支援システム使用説明会

「就職内定調査ならびに求人票の開示」

5月から隔月で年間6回の就職内定調査を実施、求人情報は各研究室ならびに就職資料室に随時配布・掲示

「就職内定率」 学部卒業生： 93%（国家試験受験前の卒業時点）

大学院生： 100%

「平成21年度 求人件数」 病院：262件、薬局：125件、企業：33件 合計420件

（4年制教育課程42名、大学院16名 合計58名に対する求人件数）

「就職委員会開催」 毎月不定期に委員会を開催し、平成21年度は12回開催した

問題点の提起：

- ① 2～3年先に予測されている薬剤師過剰供給・就職難に備えて、入学時から年間を通したキャリアサポート体制を各学年毎に構築した。平成21年度はその2年目となり学生のニーズならびに企業側のニーズに沿ったキャリアサポート内容を絶えず検証、変更しながら、内容の一層の充実が必要である。就職委員会4名、学務課事務職員2名では担当が手一杯となり、就職支援室内に薬学部専任の就職支援相談員の配置を早急に実現することを要望する。
- ② 病院、保険薬局に就職する学生が約8割の状況が続いている中で、今後の薬剤師過剰供給・就職難にも対応できるように、病院、保険薬局以外の就職先の職種・分野の拡大を図る必要がある。そのために、各学年別に年間数回開催のキャリアガイダンスには幅広い職種・分野で活躍している卒業生を招いて、職場の現状、薬剤師の今後や就職の準備などについて具体的な懇談会を開催したが、今後も継続して定期的で開催する予定である。また、「卒業生の勤務先が在校生の就職先」との認識から、卒業生との情報交換の場としての交流会を新潟と東京で開催した。今後は継続して各県単位で開催し、就職委員に加えて全学的に教員の県別担当を決めて交流を図り、キャリアサポート体制をより幅広く実効性のあるものにしたい。
- ③ 5年次の長期実務実習中の学外においても、学生のPCや携帯電話から本学ホームページにアクセスすることによって最新の就職・求人情報を知り、実習中でも迅速に対応ができる本学独自の「就職支援システム」を構築し、平成22年度春から運用を開始する。今後その運用、システムの一層の改善をはかり、学生が希望する就職先からの内定獲得を目指す。

平成 2 1 年度 委員会実績報告

委員会名	図書委員会
委員長（○印）及び委員氏名： ○大野 智、皆川信子、星名賢之助、白鳥 寛（図書館事務長）	
年間の活動： (1) 平成 20 年度から私立大学等経常費補助の教育・学習方法等改善支援で補助金を受けている。 （今年度はその 2 年目） 課題名：時間外開館による学生の学習、外部利用者の生涯学習、研究支援と蔵書点検 3 年間で、合計 7,350 千円 (2) 各大学等の特色を活かせるきめ細やかな支援（高度情報化推進メニュー）：ICT 活用教育研究支援で補助金を受けた。（電子ジャーナル、データベース等） (3) ノートパソコン（40 台）の学生への貸出をスタートした。（貸出は当日のみ） (4) 平成21年度日本薬学図書館協議会の研究集会を開催し、薬科系、医療系大学図書館職員をはじめ多数の参加があった。内容：医薬情報専門職の役割を考える (5) 学内で、学生、院生向けに、専門家を招いて各種講習会を行った。 （医学中央雑誌、PubMed、Web of Science） (6) 学内で、無料トライアルを行った。 （メディカルオンライン、治療薬マニュアル WEB 版、SciBX（サイベックス）、FSG 電子ジャーナル、Nature Chemistry、ブリタニカ・オンライン、オックスフォード・ジャーナル、ヨミダス、日経 B P 記事検索サービス、MONTHLY ミクス、Web of Science、シュブリンガー・プロトコル、e b r a r y） (7) 外国雑誌、国内雑誌、継続図書、データベース、新聞、追録のアンケートを行った。それにより、雑誌、継続図書の中止、雑誌の新規購入を行った。なお、外国雑誌は、すべて電子ジャーナルである。（Nature、Science はプリント版も併せて購入している。） (8) 閲覧室にある図書約 48,000 冊の蔵書点検と、研究室の教員の協力により各研究室の蔵書点検を 3 月（春期長期休暇中）に行った。不明になり数年経た図書、汚損・破損の図書の除籍を行った。また、各研究室から内容旧化等の理由で不要となった図書を回収し、除籍あるいは図書館への移管を行った。 (9) 平成 20 年度に提起された、為替相場の変動や外国雑誌の値上がりの問題については、アンケートの結果、予算にあわせて下位の雑誌の購入を中止するなどして対応した。蔵書の充実については、シラバス掲載の参考図書や利用の多い図書および学生、教員希望図書を購入した。ラーニング・コモンズについては、今後も検討していく必要がある。	

問題点の提起：

- (1)現在、外国雑誌すべての電子化を行い、一部を除き学内LANに接続しているパソコンであれば、論文を閲覧することがすでに可能になっているが、今後、学外からも閲覧できるように整備していくことが必要である。
- (2)他大学でも取り組んでいるように、課題等について、図書館で会話しながら勉強できるラーニング・コモンズ学びの場の提供について、検討する必要がある。

平成 21 年度 委員会実績報告

委員会名	機器委員会
委員長（○印）及び委員氏名： ○大和 進、本澤 忍、安藤昌幸	
年間の活動： 複数の教室が講座順番購入を利用して購入した中型機器を中央機器として登録した場合には、中央・共通機器維持費から修繕費を支出できるようにした。同時に、使用不能となっている機器の除却措置を行った。また、中央機器を4部門（高分子構造解析、有機構造解析、微量定量解析、細胞内機能解析）に分け、それぞれに2名の共同利用機器施設運営委員を配し、内1名を管理責任者に定めて実施した。 平成21年度私立大学研究設備整備費等補助金（私立大学等研究設備整備費）に、「生体内微量物質の高感度定量装置一式」の申請を行い、内定（3,950万円）を得た。教育研究用機器備品に関しては、学生実習関係4件（513万円）および講座順番機器関係3件（1,80万円）を支出して整備に努めた。	
問題点の提起： 「中央・共通機器の使用に関する新システムについて」の1項目に、「中央機器の使用に際して派生する消耗品の経費については、使用者負担の原則を導入する。」を掲げているが、これに対しては、両学部の共通利用となる将来に向けての環境整備が必要とされる。すなわち、外部評価委員の指摘にもあるように、他の共通施設（実験動物施設、放射線安全管理施設）における利用規定との整合性をとる必要がある（昨年度の問題提起＝継続）。	

平成 2 1 年度 委員会実績報告

委員会名	国 際 交 流 委 員 会
委員長（○印）及び委員氏名： ○小宮山 忠純、鍋倉 智裕、酒巻 利行、福本 恭子	
年間の活動： 1. 新潟地域留学生等交流推進会議第19回運営委員会に出席 平成22年2月4日（木）14：00～15：50 新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」にて。 会誌「にいがた」の廃止、ホームページの充実、総会は必要に応じて開催することに変更。 2. 在外研究の申請と補助：短期補助申請・承認12件、うち10件補助。 3. 研究活動支援の研究系職員（外国人を含む）の募集：応募者外国人5人、採用5人。 4. 国際交流セミナー：1件（J. T. Cheng 教授、台湾）。 5. 姉妹校マサチューセッツ薬科大学（MCPHS）との交流 平成22年3月21日（日）～27日（土）、『米国における薬学教育、特に臨床薬学教育についての視察、および本学からの学生派遣の可能性についての調査』を目的に鍋倉、酒巻委員が訪問した。訪問者は、相手校の厚意によりタイトで充実した期間を経験した。平成22年度に、訪問した2名による、学生への学内報告会および日本薬学会医療薬化学部会主催「医療薬学フォーラム2010/第18回クリニカルファーマシーシンポジウム」での発表を計画している。今後学生の訪問を含めた更なる発展が期待される。 6. 国際交流パーティの実施 平成22年3月12日（金）18：00～20：00、カフェテリア多目的コーナー。出席者計56人：留学生・外国籍職員家族等19人、日本人教職員家族等21人、大学院生8人、ESS部員8人。 両学部委員会の共催で実施し、学部ESSに声をかけ、大学院以上教職員全員に声をかけ、経費の補助も行った。留学生および日本人参加単位毎に自国の料理1皿を持参。評判良く有意義であった。今後も開催希望が多い。	
問題点の提起： 国際交流をさらに進める項目としては、姉妹校への教員の相互交流のほかに、1. 姉妹校間の学生相互訪問の実施。2. 姉妹校の増設。3. 外国人留学生の公募。4. 外国人留学生の生活援助の充実。5. 英文ホームページの開設。など多岐にわたるが、いずれも予算が必要なため実現がなかなか困難である点がある。本学としてできることから順次改良・実施してゆくことと思われる。	

平成 21 年度 委員会実績報告

委員会名	臨床実務教育委員会
委員長（○印）及び委員氏名： ○若林広行、北川幸己（学部長）、杉原多公通（教務委員長、）河野健治、渡邊賢一、上野和行、影向範昭、朝倉俊成、酒巻利行、阿部 学、齊藤幹央	
年間の活動： <u>4 年制教育</u> 1. 4 年次学生（12 名）の臨床実務実習の計画策定・実施（6～7 月） 病院 4 週間と保険薬局 2 週間を全員必修として実施。 <u>6 年制教育</u> 1. 3 年次学生臨床実習の計画策定・実施（4 月、9 月） 2. 4 年次学生事前学習の計画策定・実施（5 月～7 月） 3. 平成 22 年度 5 年次学生臨床実務実習実施に向けた準備・対応 ・ 関東地区調整機構を介した実習施設の確保 ・ 文部科学省への実習施設概要など申請書類の作成・提出（6 月） ・ 文部科学省でのヒアリングとその後の訂正書類の再提出（8～9 月） ・ 実習支援システムの構築と運用 ・ 実習施設訪問体制の構築、実習評価法の作成 ・ 実習契約書の作成と契約の実施 ・ 学生の抗体検査の実施 ・ 学内教員への臨床実務実習事前説明会の実施 ・ 学生への臨床実務実習事前説明会の実施 ・ 県内外の実習受け入れ施設との実習事前説明会の実施 4. OSCE の実施計画策定・実施 ・ 共用試験センターへ OSCE 実施計画書の提出ならびに本学モニター員の選定・届け ・ OSCE 運用規定、運用マニュアルの策定 ・ OSCE 評価者養成講習会の計画策定・実施（学内教員、学外評価者） ・ 他大学教員の OSCE 評価者相互派遣の実施 ・ 拡大臨床実務教育委員会の開催 5. 模擬患者（SP）養成講習会の計画策定・実施（3～12 月） OSCE ならびに臨床実習・講義に参加できる SP(50～60 名)の養成講習会を毎月一回、学外（朱鷺メッセ）と本学で同日 2 回開催	

その他

1. 臨床実務実習県内拠点病院化の推進
2. 新潟地区 認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップの共催、タスク参加
3. 薬学部薬剤・調剤関連実習室の整備・充実
4. 模擬薬局の整備と医薬品の充実
5. 人体模型（AED の使用練習用など）の整備・充実
6. 6年次アドバンスト医療・臨床系講義についての集中会議の開催（8月）

＊ 本委員会開催は毎月一回定期的に開催し、更に随時、検討課題が生じたときには臨時委員会ならびに拡大委員会を開催した。

問題点の提起：

- ① 臨床実務実習では調整機構からの実習先確保を基本としながらも、新潟県内出身在学生数の急増に対応するために、県内主要病院、県内主要調剤薬局との本学特別枠の更なる確保に向け、県薬剤師会、県病院薬剤師会、新潟県病院局、新潟県厚生連本部などとの一層の緊密な連携構築・推進が必要である。
- ② 事前学習ならびに OSCE における学外講師、学内外評価者の安定確保のために、定期的な懇談会、研修会を実施し、緊密な連携を構築する必要がある。
- ③ OSCE における学内担当教員の休日時間外対応の処遇について措置する必要がある。
- ④ 本委員会の担当業務が多岐にわたり、かつ学外との折衝業務や臨床現場訪問などもあり、年間の活動については上記に略記した通りであるが、本委員会担当業務は年間を通してほぼ毎日対応が求められているのが現状である。毎月定期的に委員会を開催して対処しているが、今後は担当委員の増員の可否、医療系、臨床系（実務家）教員の今後のあり方、計画的な適正配置なども早急に検討しなければならない。

平成21年度 委員会実績報告

委員会名	サイバーキャンパス推進委員会
委員長（○印）及び委員氏名： ○杉原多公通（教務委員長）、白鳥寛（図書館職員）、生野昭雄（教務課長）、茂木弘邦（庶務課長） 参加教員：任意協力教員	
年間の活動： 本学 IT 環境の充実・整備と e-learning に基づく学生・卒業生の学習支援、FD 活動の充実を目的に本事業を立ち上げ、学内教員の協力を仰ぎ事業を推進している。平成 21 年度は三ヶ年プロジェクトの最終年にあたり、これまでの進めてきた事業の拡充と検証につとめた。 ハード面：①CB201 臨床大講義室の AV・IT 環境の整備 ソフト面：③cyber-NUPALS の充実と検証・改善、④WEB 演習システムの構築、⑤実務実習支援システムの構築、⑥ソフトウェアの包括ライセンス契約の締結	
これまでのまとめと今後への期待： 当初、いくつかの新しい取組みの立ち上げも考えたが、実際には教員の十分な協力が得られず、これまで立ち上げてきた事業の維持で終始した点が悔やまれる。しかし、これまで立ち上げてきたソフト面の取組みは「他大学の模範」ともなりえるものであり、今後の参考のためにも「何を考え進めてきたのか」、最後に少し記しておきたい。 Cyber-NUPALS は実際に行った教育内容の記録、すなわちティーチング・ポートフォリオであり、「聞き逃してしまった」、「もう一度授業を聞いて復習をしたい」という学生のニーズに合った取組みである。授業計画（シラバス）と実際の授業進度の乖離を再認識する『気付き』の機会を教員に与える FD の性格をも有している。音声という、所謂『出し惜しみ』した情報の提供によって、学生の能動的学習習慣を引き出したいという考えと、著作権問題の回避、教員負担の軽減という思惑が重なり VodCasting（ビデオ配信）ではなく PodCasting（音声配信：マイクを使って行われる授業音声を編集したのちに配信）に固執した。しかし、今後、他学部講義の受講のことを考えるとアクセス制限を付けた VodCasting の運用も今後検討する必要がある。米国で行われているような『ダブル・ディグリー（double degree）』制度の立ち上げ・運用を考え始めている大学も幾つかあることから、本学もこの流れに乗ったり、このような段階にまで進まなくても「食品のことも熟知した薬剤師」のような専門性の強い学生を育成する上では、時間的な制約のない VodCasting による講義の聴講とラーニング・ポートフォリオの作成・評価を組合せた授業が必要になる。サイバーキャンパス整備事業を引き継いでゆくことが決まった IT 委員会には、教	

務委員会と協議の上、是非ともこれらの特色ある取り組みを早急に立ち上げ運用していただきたい。

自己学習支援システムは、薬学教育モデル・コアカリキュラムに記載されている SBOs（到達目標）に対応した演習問題を収載しており、学生自身が到達度をはかることができるシステムである。膨大なデータを取り扱うことが可能であるという ICT（Information Communication Technology）の利点を活かして、解いた問題と成績をすべて記録として残し、いつでも振り返ることができるようにシステムを構築した。修学内容の記録、すなわちラーニング・ポートフォリオの一つである。学生がコンピューターの前に座る度に同じ範囲の演習をしても異なった問題が出てくるようにと、出題頻度の低いものを優先的に出題する工夫をも盛り込んでいる。実務実習が始まり学生が大学から離れた時にでも学生の学力を大学が把握できるようにしたいとの考えから、模擬試験モードも併設している。教務委員会が主導して各回の授業内容と薬学教育モデル・コアカリキュラムに記載されている SBOs との対応を明記したシラバスを作成したことから、SBOs に対応した問題を収載する自己学習支援システムも授業科目のみならず各回の授業に対応させることができた。本システムは現在共用試験対策委員会に移管し、運用している。「授業の復習だけでなく、折に触れて学生が演習を行えば、不得意分野が明確になり、試験前にその分野を見直すことで得点上がる」と学生に積極的にアピールすれば、システムを利用する学生が増え、能動的学習習慣が植え付けられると期待している。オリエンテーション時に是非学生にアピールしていただきたい。システム導入当初は収載問題数が少なく、「若手教員が主導して問題を作ろう！」という機運が高まっていたが、いつの間にか立ち消えになったのが非常に残念である。年度開始当初に前年度の修学内容の修得度を振り返る『学年総括試験』や薬学総括演習Ⅰの修得度を測る演習試験と本システムの演習問題の形式を揃えてあるので、これらの問題を取り込めば本システムに収載される問題数が増える。また、学生に対して作題演習を行うことも今後検討していただきたい。作題演習は学生の理解度が深まる一つの手段であるのと同時に、できてきた問題をシステムに取り込めば「学生自身の手による、まさしく『自己学習』」となりえる。幾つかの教科目では作題演習を行っているようだが、すべての分野で作題演習を開始することも教務委員会、あるいは薬学教育研究センターで検討していただきたい。年を重ね、収載する問題数が増えれば、非常に良いシステムになるはずである。成熟が必要ではあるが、足掛かりは構築した。

臨床実務実習連携システムは、実習で気が付いたことをメモしたり、指導者からのアドバイス（形成的評価）を記録として残すことによって、学生がいつでも振り返ることができる、ラーニング・ポートフォリオの一つである。言葉で発せられた形成的評価を「忘れないように書きとめておく」ためのツールであり、「同じ項目に関する次回の実習前に、前回の実習時のポイントを振り返り、教育を定着させる」ことを考え構築した。「厳しくても構わない」形成的評価の記録であるが故に、各 SBOs への到達度を示す評定は 6 段階程度が相応しく、そのようにシステムに組み込んでいる。「どの SBOs を何回（何日）実習したのか」が見えるようになっており、実習に携わる指導者や教員に対して「実習計画の見直し」の機会を与えている。本システムは臨床実務教育委員会に移管し、実習計画を指導者がいつでも入力できるようなページや評定の一覧表や推移表

等を一目で見られる集計ページを加え、完成版になった。

「能動的な学習習慣を学生に定着させたい」との思いから、膨大なデータを取り扱うことが可能であるという ICT の利点を活かして、ティーチング・ポートフォリオ、ラーニング・ポートフォリオを形成する 3 つのシステムを立ち上げ運用してきた。一部の教員にはこれらの意図が上手く伝わらず、未だに協力を得られていないのが残念である。

文部科学省の補助を得て 3 年間進めてきた『サイバーキャンパス整備事業』は、政権の交代に伴い今後消滅することが決まった。これに伴い「サイバーキャンパス推進委員会」は IT 委員会に取り込まれ、今後継続発展させることになった。ICT を活用した教育に関しては、上述していない「やり残したこと」が沢山ある。是非とも、IT 委員会と教務委員会で協議・熟考していただき、次、さらにその次の「特色のある取組み」を立ち上げ、進めていただきたい。

IT 委員会の今後の活躍に期待する。

平成 2 1 年度 委員会実績報告

委員会名	防災・環境委員会
委員長（○印）及び委員氏名： ○佐々木正憲、土橋洋史、本澤忍	
年間の活動： 1) 産業廃棄物のマニフェストの調査：普通ゴミとして廃棄してはならないものの調査を継続。 （H21 年度；毒劇物、有機溶媒、実験動物・医療用具・医療器具（動物施設委員会）、RI（RI 施設 委員会）等での確に行われていることを確認済み） 2) 防災マニュアルの作成を目的として、他大学等の防災関連マニュアル情報の収集継続。法人本部、応用生命科学部と対応予定。なお、H21 年 12 月には法人本部主催、学生避難訓練に参加した。 3) 規定の整備、業務内容の検討 委員会の業務内容の見直し、及び規定を整備の継続。本件は学長・学部長会議レベルで H22 年度から薬学部・応用生命化学部及び法人本部を含めて防災・安全委員会として改組されることになった。	
問題点の提起：	

平成 21 年度 委員会実績報告

委員会名	公開講座 委員会
委員長(○印)及び委員氏名: ○渡辺賢一 皆川信子 大貫敏男	
年間の活動: 第 32 回新潟薬科大学薬学部公開特別講演会(予定) 講師:福岡伸一 演題:生命を解くキーワード、それは“動的平衡” 日時:平成 21 年 9 月 27 日(日)午後 1 時 30 分～2 時 30 分 会場:新潟市民プラザ(NEXT21 6 階ホール)	
問題点の提起: (1)講師・会場などの確保は新年度 4 月になってからでは困難である。適切に施行するためには、前年度に計画しなければ間に合わない。そこで、今年度は来年度(平成 22 年度)の計画を立案した。 第 33 回新潟薬科大学薬学部公開特別講演会(予定) 講師:瀬名秀明 演題:生命と物語の未来を語ろう 日時:平成 22 年 9 月 26 日(日)午後 1 時 30 分～2 時 30 分 会場:新潟市民プラザ(NEXT21 6 階ホール) (2)公開講座は本大学の広報活動の一環として行う。一般市民のみならず高校生なども視野に入れた活動を目指したい。「健康・薬・生命・食・病気」などがキーワードとなるが、市民の関心を喚起する目的で毎年実施したい。上記のように、本講演会を適切に施行するためには前年度に計画しなければ間に合わない。 広報委員会・応用生命科学部などとの連携が重要であることが指摘されている。広報活動と連携して公開講演会の案内を高校生などに広げている。応用生命科学部との合同委員会など、来年度は他委員会の活動となる予定である。	

平成 21 年度 委員会実績報告

委員会名	共用試験対策委員会			
委員長（○印）及び委員氏名：				
○北川 幸己、杉原 多公通、若林 広行、佐々木 正徳、朝倉 俊成、高津 徳行				
年間の活動：				
共用試験（CBT、OSCE）を全体的に見渡し、その対策（時期及び方略）を効率的に行うため、平成 21 年度から本委員会を設置した。CBT 委員会委員、臨床実務教育委員会委員、教務委員長及び学部長で活動した。 （1）CBT について 1. 薬学総括演習Ⅰの実施に際して、①使用するテキストの選定、②9 月以降の演習日程の決定と実施方法について委員会提案を行った。 1) 9 月 24 日～12 月 18 日の期間に 124 コマの演習を実施すること。 2) 月曜～金曜の午前 2 コマ、午後 1 コマの演習を行い、金曜日午後にはその週の演習に関する確認テストを実施すること。 3) 新型インフルエンザの感染により総括試験を受けられなかった学生(3 名)に対して、追試験を 1 月 7 日に実施した。 4) 2 回の総括演習試験を CBT に準拠して実施し、総点が 60%をクリアした学生(147 名)に単位認定した。 2. 毎週金曜日に行う確認テストを編集し、実施を担当した。 3. 共用試験センターが公表した CBT 実施マニュアルを本学の実情に沿った形で編集し、本学の CBT 実施マニュアルを策定した。 4. 昨年導入を決定した自己学習支援システムは、プレスユー社（卒業生が主宰）と本学教員有志で開発したオリジナルな自習システムである。学年統括試験の問題をアップするなど教員も参加してシステム及び収載問題数の充実を図った。なお、本システムに関して、4 月に学生に対して使用法等の説明会を、また、教員に対しても問題作成・登録の説明会を開催した。 5. 薬学総括演習試験の問題作成は、教授会構成員全員に依頼した。また、ゾーンごとに問題のブラッシュアップを行い、不適切問題等の抽出と改善に努めた。 （2）OSCE について OSCE の対策及び実施については、臨床実務教育委員会が中心となった。 （3）共用試験の結果について				
	実施日程	受験者数	合格者数	合格基準
CBT	本試験：平成 22 年 1 月 20、21 日	147	147	正答率 60%以上
OSCE	本試験：平成 21 年 12 月 13 日	155	155	細目評価 70%以上 概略評価 5 以上
共用試験		155	147	

問題点の提起：

1. 平成 21 年度の共用試験後に、CBT と OSCE の実施時期について再検討する必要が指摘された。
学生の心理的負担をもっとも軽減できる日程を検討し、平成 22 年度は CBT を 12 月中旬に実施し、また、1 月上旬～中旬に OSCE 直前トレーニングを行った後、1 月末に OSCE を実施する日程とした。
2. 薬学総括演習試験の実施方法と合格判定基準について、再検討する必要がある。
3. OSCE に関しては、本委員会と臨床実務教育委員会との業務の分担を明確にする必要がある。

平成 21 年度 委員会実績報告

委員会名	C B T 委員会
委員長（○印）及び委員氏名： ○ 藤原英俊、佐々木正憲、高津徳行、浅田真一	
年間の活動： 1 HB101 教室で体験受験、本試験の準備を 8 月下旬から準備を行った。 2 受験生の登録と受験票の配布 ・ C B T 体験受験は 4 年次学生全員を対象として行うこととし、全員の名簿を薬学共用試験センターに提出し、薬学共用試験センターより発行された受験票を学生に配布しました。 ・ CBT 本試験は 4 年次までの全単位取得者を対象とし、学生名簿を薬学共用試験センターに提出しました。 3 教員向けの講習会及びトライアルを実施 教員の C B T 講習会及び中継サーバが正常に稼働するかテストランを行った。 体験受験：平成 21 年 9 月 8 日 本試験：平成 22 年 1 月 12 日 4 C B T 体験受験について ・ HB101 教室において、学生への説明会及び講習会を行った。 （平成 21 年 8 月 27 日） ・ 体験版ソフトを使用し、C B T トライアル本番を想定した講習会を行いました。 ・ CBT 体験受験を実施した。 （平成 21 年 9 月 16 日、17 日） ・ C B T 体験受験の個人成績を学生個人に配布しました。 5 C B T 本試験の実施（平成 21 年 1 月 20 日、21 日） 学生向け講習会：平成 22 年 1 月 14 日 4 年生学生を対象に、C B T 本試験（平成 21 年 1 月 20 日、21 日）を HB101 教室で 2 日間実施しました。	

6 薬学共用試験センターと大学との連絡係として、連絡を取った。
ハード及びソフトを含めて CBT が順調に実施できるように行った。

7 CBT モニター員として他大学へ出張している。
高崎健康福祉大学へモニター員として行きました。
体験受験：平成 21 年 9 月 15 日
本試験：平成 22 年 1 月 13 日
追再試験：平成 22 年 3 月 3 日

それ以外に、CBT 委員会は別紙のごとく、年中活動している。

問題点の提起：

問題点の提起：

- 1 CBT 実施に向けての、PC のセットアップ等準備期間が必要です。現在、HB101 教室の利用は教室の予約が必要になっていますが、自動的に一定期間（8 月から翌年 3 月）専用に使用出来るように考慮してほしい。さらに、できるならば HB101 を CBT 室とすることが望ましい。これによって、CBT 及び講義、自己学習等に専用教室として利用できる。
- 2 HB101 教室を CBT 室にして、PC を収納できる机に変更することにより、PC のセットアップの時間を非常に短縮することができます。これにより PC を講義でも使用できるようになります。同時に、教員の負担が軽減することができます。
- 3 CBT を実施する教室の床上げをして、フリーアクセスにすべきである。現在、床を這わせている LAN ケーブルのカバーがはがれて来ており、また、教室で飲食するために、LAN ケーブルの断裂が起こる可能性があり、CBT 実施に関して非常に危惧している。この件は早急に改善する必要がある。
- 4 CBT について、3 年次以降の学生に対しても、CBT の特性と重要性を認識させ、普段の講義を理解させる必要があります。

☐ 共用試驗閣運業務
☐ 體験受験閣運業務
☐ CB1體験受験
☐ 本試験閣運業務
☐ CB1本試験
☐ 追・再試験閣運業務
☐ CB1追・再試験

— 172 —

平成21年度 委員会実績報告

委員会名	薬学教育研究センター
委員長（○印）及び委員氏名： ○藤原英俊(専任)、佐々木正憲（専任）、土橋洋史（兼任）、高津徳行（兼任）	
年間の活動： 卒業延期生対象： ・ 国試過去問に対する解説作りの指導 ・ 学生に対する生活指導、話し相手としての相談 ・ 演習関係の実務全般（予定表、用具の準備、学生への連絡等） 4年生対象： ・ 一問一答式国試過去問集の作成と配布 ・ 国試の過去問と卒業試験の過去問を学内 LAN による公開 国試不合格者に対する既卒者対策 大学として既卒者に連絡を取り、卒業生にできるだけ国家試験の合格してもらいたいと考えて、模擬試験問題の送付を行いました。 国試過去問の解説作り 卒業延期になった学生は、これまでに修学した内容や国家試験の過去問題の理解が曖昧である。この曖昧な知識を再度、確認修得する意味で、過去の国試問題について教科書等を調べ、自分の考えと言葉で、国試の過去問の解説集の作成を行う。これにより、不確かな知識を確実なものにすることができる。同時に、その問題の周辺の事項についても勉強することができる。方法については、（１）学生は過去の国試問題について教科書等を調べ自分の考えと言葉で解説を作成する。（２）作成したレポートを学生の前で説明する。（３）他の学生や担当教員とのディスカッション及び補足説明を行う。（４）レポートの追加及び訂正を行い、再度レポートを全員に配布する。（５）同じレポートを一部センターに提出されファイルとして保存されている。この解説集を一時は LAN による公開も行いましたが、現在、個人情報保護の観点から中止している。 学生に対する生活指導、相談 卒業延期になった学生は、生活が不規則で欠席や遅刻が多い傾向がある。勉学する上で、遅刻や欠席は成績不良の最大の原因であり、これを改善することは、直接学力向上につながると考える。そのために、朝、学生に電話を行い、出席を促した。	

一方、精神的にも弱い学生が多く、悩み事を聴いてもらいたいので、話しに来ますので、学生の話し相手になった。しかし、心理的状态に関することはセンター教員では対応できないので、医師あるいは心理カウンセラー等に相談するよう指導している。

一問一答式国試過去問集の作成と配布

一問一答式国試過去問集はセンター教員全員で作成を行い、全学生に配布を行った。この一問一答式国試過去問集は学生の復習及び国試対策に十分活用されている。また、この一問一答式過去問題集は留年生の確認テストに利用も可能であると考えています。

国試の過去問と卒業試験の過去問を学内 LAN による公開

国試の過去問は各予備校から本として出版されますが、学生が過去問を勉強する時に解説があると最初に解説を読んでしまい、本当の意味での勉強にならない。解説のない国試過去問は重要である。卒業試験の過去問についても、卒業試験対策の対策と傾向を知る上で非常に重要である。同時に、国試の過去問と卒業試験の過去問は教員が卒業試験等の試験問題を作成する時にも利用できる。

問題点の提起：

(1) 学生の気質、精神的悩みはここ数年大いに変化をしてくれています。上でも述べましたが、精神的な悩みは非常に増えてきており、センター教員では対応できない。そこで、医師あるいは心理カウンセラー等に相談に行くよう指導している。このことは大学全体の問題として取り組んでいかなければならない問題だと考えます。

(2) 成績下位学生がこれから増加すると考えられ、先生方の負担も増加すると考えられますが、薬学教育センターの負担も非常に増加してきています。特に、(1)で述べましたような問題点が増加しており、専任の薬学教育研究センター教員の精神的な負担が多くなっております。

(3) 薬学教育センターの教員は国試委員や共用試験対策委員を兼ねており、国試委員会や共用試験対策委員会の仕事との区別が付きにくい点がありますが、薬学教育研究センターでは、国試委員会や共用試験対策委員会の仕事言い換えれば、4年生から6年生までの教育について全体的に把握できる点は非常に意義があります。これら考えると国試委員会や共用試験対策委員会を統合した委員会として一貫性を持たせる方がよいと考えます。そこに薬学教育センターが関与することによって以前から述べられている「薬学教育の進め方・内容」の方向性が同時に見えてくるように考えられます。

平成21年度 委員会実績報告

委員会名	高度薬剤師教育研究センター運営委員会
------	--------------------

委員長（○印）及び委員氏名：

○長友 孝文、高中紘一郎、上野 和行、若林 広行、渡邊 賢一、影向 範昭、
朝倉 俊成、北川 幸己、茂木 弘邦（事務局）、小田 裕美（事務局）

年間の活動：

本学では、「薬剤師生涯教育講座」や少人数でのグループ研修を通じて、新潟地区の薬剤師の方々にスキルアップの場を提供する目的で、「高度薬剤師教育研究センター」を2006年に設置した。また、一昨年に認定された薬剤師生涯研修認定制度認証機関としての本センターの活動も2年目に入り、申請のあった15名の薬剤師に研修認定薬剤師証を発行した。なお、本センターの活動報告書は別途小冊子として編集し刊行する（平成22年9月）。

1. 平成21年度新潟薬科大学「薬剤師生涯教育講座」

新潟県薬剤師会、新潟県病院薬剤師会、新潟薬科大学薬学部同窓会との共催で、全9回の生涯教育講座を開講した。

第1回	4月18日	緩和医療と薬剤師	済生会横浜市南部病院 加賀谷 肇先生
第2回	5月16日	患者さんに優しいがん治療	東京大学医学部付属病院 中川 恵一先生
第3回	6月20日	リウマチの病態と最新薬物治療	新潟県立リウマチセンター 村澤 章先生
第4回	7月25日	在宅医療と薬剤師～愛情と尊重をもって接する温かな関係～	スギメディカル株式会社 川村 和美先生
第5回	8月22日	患者から見た薬剤師像	NPO ささえあい医療人権 センター 辻本好子先生
第6回	9月26日	医薬品情報の収集と活用のために	東京大学薬学系研究科 大谷 壽一先生
第7回	10月24日	薬剤師に必要な血糖モニタリングの考え方と実践例	慈恵会医科大学 西村 理明先生
第8回	11月7日	心房細動の薬物治療～実践的なノウハウを知る～	杏林大学医学部 池田 隆徳先生
第9回	12月19日	薬剤師のための薬疹講義	新潟大学歯学部研究科 伊藤 雅章先生

2. 高度薬剤師教育研究センター主催の研修グループ活動及び研修会

- 1) 糖尿病専門薬剤師研修グループ：朝倉准教授、影山助手（本学臨床薬学研究室）が中心となって、コースⅠ（全5回）及びコースⅡ（全7回）のグループ研修（講義、実習、SGD）を行った。
- 2) 医療コミュニケーション研修グループ：高中准教授（本学高度薬剤師教育研究センター）を中心として、全7回のグループ研修を行った。また、第3回日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会（2002.1.9-10、新潟市）において2件の発表を行った。
- 3) 長友センター長が中心となって第1回及び第2回の「バイタルサイン研修会」を開催した。
日時：第1回：平成22年2月14日（日）、第2回：平成22年3月14日（日）
場所：本学臨床大講義室（CB201）

3. 高度薬剤師教育研究センター教員による第3回日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会の開催

本学高度薬剤師教育研究センター：高中准教授が実行委員長として、表記の学会を主催した。

日時：平成22年1月9日～10日

場所：新潟市 朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター

4. 高度薬剤師教育研究センター「第2回公開シンポジウム」の開催

2009年10月に完成した6年制薬学教育に対応した「学生ホール・臨床薬学棟」の竣工に合わせ、第2回公開シンポジウムを開催した。

日時：平成21年10月17日（土）

場所：新潟薬科大学

講演：

「輝ける薬学・薬剤師の未来に向けて」

京都大学医学部付属病院・薬剤部長

乾 賢一 教授

「薬局薬剤師にとってのバイタルサインとは？」

一般社団法人薬剤師あゆみの会・理事長

挟間 研至 先生

5. 高度薬剤師教育研究センター運営委員会の開催を平成21年度は10回開催した。

6. 研修認定薬剤師認証プロバイダー連絡協議会に、平成21年度は2回出席し、他プロバイダーとの意見交換、情報交換を行った。

問題点の提起：

1. 活動状況について：本センターが中心となって取組んでいる「薬剤師生涯教育講座」及び「グループ研修」には多くの薬剤師が参加しており、活発な活動が展開されている。特に「バイタルサイン研修会」はタイムリーな企画であり、現場薬剤師からの要望も高いことから、次年度もグループ研修として実施していく。
2. 限られた予算内で創意工夫をしながらセンター運営を行っているのが現状である。本センターの活動は大学としての戦略的な意味合いも持つことから、今後外部補助金の導入も検討していきたい。
3. 次年度の事業計画については、十分に時間をかけて良質なプログラムを立案することで、受講登録者数の増加と受講者の満足度のアップにつなげたいと考えている。
4. 広報誌について：平成21年度運営委員会の中で、薬剤師の論文発表の場として本学が主管する学術雑誌の刊行が議論されたが、現時点では予算及び組織の点から対応が難しいと思われる。一方、本センターの年間活動報告に関する冊子を年1回発刊することとしているが、学内及び他認証機関への配布にとどまっている。本センターの広報誌として研修グループの活動状況、認定薬剤師の紹介、本センターの活動に関するトピックスなどの記事をまとめた「ニュースレター」形式のものを年2回程度発刊することを考えたい。

平成 21 年度 委員会実績報告

委員会名	薬用植物園運営 委員会
委員長（○印）及び委員氏名： 委員長及び委員氏名：○白崎仁 武久先生、渋谷雅明先生（平成22年3月より）、関谷倫子先生*（*平成22年6月退職）	
年間の活動： 年2回の五頭薬草園運営組合会議（4月24日、9月11日）実施（阿賀野市） 1年生 五頭薬用植物園研修 105名×2クラス（引率：池城先生、武久先生、高橋先生、浅田先生）（5月19、20日） 植物園の管理運営。阿賀野市との共同企画で、市民参加による春と秋の薬用植物園観察会（6月7日、10月18日）実施。 長野県佐久薬草の会の薬用植物園観察会（6月24日）実施。 新潟市食生活改善推進委員会の薬用植物園観察会（6月29日）実施。 薬用植物園、「健康に役立つ薬用植物講習会」を開催。 長岡向陵高校 10、明訓高校 3、阿賀野高校 6、引率高校教員 3、学生 TA 20、大学教員 3（白崎、武久、関谷）ほか薬草園管理員 2。合計 47 名。6月21日(日) 平成21年度独立行政法人科学技術振興機構の地域の科学舎推進事業、地域活動支援のいける新潟県立植物園との連携機関として、薬用植物園運営委員会（白崎、武久、関谷）が「身近な植物の力を感じよう」（植物観察会、植物採集、標本作製、成分分析等を行う）を実施した。（8月2日、8月22日） 国公立大学薬用植物園園長・担当者会議：渋谷先生出席（平成22年3月30日） 五頭薬用植物園目録の改訂と、薬用植物園本園目録の改訂を行った。（平成22年4月）	

問題点の提起：

薬用植物園は、薬科大学の顔としての役割を担っている。外部団体の見学や講習会などに活用し、大学の存在をアピールする機会を増やしたい。昨年度に続き、SPP 助成金を申請したが、採択されなかった。しかし、高校に対して、継続的な行事を通して、大学の魅力を強調したい。近隣の特定の高校のほかに、高大連携行事として、広く案内を配布して、高校生を対象にした薬用植物園を活用した講習会を、毎年 1 回は企画したい。長期的には、大学の存在価値を高め、入試にも大きい効果があり、社会的な貢献にもつながります。新潟県立植物園とも協力できることについて話あって、より興味ある行事を実施したい。

平成 2 1 年度 委員会実績報告

委員会名	遺伝子実験施設管理 委員会
委員長（○印）及び委員氏名： ○小宮山 忠純、渡邊 賢一、尾崎 昌宣、安藤 昌幸	
年間の活動： 委員会では、組換え DNA 実験関係の施設、設備が利用者にとって使いやすく時代に合ったものであるよう努めている。平成 21 年度はこの方針でほぼ順調に運営できたものと思う。	
問題点の提起： 近年、遺伝子組換え DNA 実験は、極めて一般的な実験手法となってきている。そのため安易な操作等で事故につながらないよう、今後とも初心に返り基本に忠実で慎重な実験の実施、継続が望まれる。また、倫理委員会との連携も重要である。	

平成 21 年度 委員会実績報告

委員会名	動物実験 委員会
委員長（○印）及び委員氏名： ○ 尾崎 昌宣（実験動物施設長）（薬）、渡邊 賢一（薬）、若林 広行（薬）、 佐藤 眞治（応）、市川 進一（応）、三宅 紀子（応）	
年間の活動： 1 実験動物施設の日常管理、清掃、廃棄 2 新規程についての利用者講習会の開催 3 慰霊祭の開催 4 内外の個人、組織、団体からの問い合わせ、連絡、情報に対する広報及び授受・応答 5 公私立大学実験動物施設協議会との連絡	
問題点の提起： 日常の管理業務が第一であり、利用者に快適・清潔かつ便利に、利用者の負担を出来るだけ少なく利用できるように心がけている。日常の管理は、各利用者の責任により動物の飼育・管理がなされているが、個人によってそのハードルが異り、必ずしも統一されていない。現在、清掃当番は各研究室毎に決めているが、利用者の負担を軽くするため、施設長が定期的に清掃・片づけ作業を行っている。共同の場合は、ハードルの相違が各人の利用を難しくしたり、室内環境の悪化を招くことから、特に清潔上一定のレベルを保つためには、これらの作業を行う人員の確保・配置が必要である。そのための経費が必要であるが、使用動物、飼料については既に自己負担（受益者負担）でまかなわれており、屍体の廃棄、洗剤、白衣の洗濯、ケージ補修、ラベル、ビニール袋、給水フィルター・ノズルなどの受益者負担分の分割識別が難しいものは、共通費用でまかなっている。したがって、受益者負担により算出される額を作業員等の人件費にあてることは難しい。この解決策として、利用研究室以外に、大学院生のアルバイト補助を雇用することも考えられる。 上記の日常業務に加え、本年度は、文部科学省によって提示された基準・規程に基づいた新規規程の運用を開始し1年が経過したが、この運用の円滑な運営に関していくつかの問題点があり、実験実施者にとって不便なことがいくつか明らかになってきた。特に、動物実験計画書の提出と実験実施日が急迫することが多く、実験遂行に支障がでることがある。また、実験は継続するも	

ので、その都度提出する事務作業も頻回となり、利用者の負担がいつそう大きくなった。このような負担を少なくし利用しやすくすることを念頭において、速やかに運用を進めていくためには、本学の実情に沿った独自の方法を考案することを継続する必要があるだろう。

これらを改善するためには、委員会以外に、利用者を中心とした別の組織も必要であるかもしれない。

平成 2 1 年度 委員会実績報告

委員会名	体育施設管理運営委員会(共通)
委員長（○印）及び委員氏名： ○高橋努（体育施設管理責任者） （薬学部）尾崎昌宣、本澤忍 （応用生命科学部）太田達夫、中村豊	
年間の活動： 本委員会、事務部学生課と連携して、学友会、サークル、一般学生の協力により、大きな事故、苦情、トラブルもなく、円滑に体育施設を管理運営しました。 また、予算執行は、平成 2 0 年度に法人本部の管財課から本委員会に移行され、本委員会の仕事量は大変増えましたが、学生の要望等に対して適切に、迅速に対応ができ、良い運営ができています。	
問題点の提起： （１）テニスコート、グラウンドにナイター照明を設置する。 （２）体育館に冷暖房、更衣室に冷房の設備を設置する。 （３）体育館、トレーニング室、グラウンド、テニスコートの体育施設に放送・映像機器設備を設置する。 （４）第 2 体育館を新設する。 （５）関連規程について見直しをする。	

平成 21 年度 委員会実績報告

委員会名	放射線安全管理委員会
委員長（○印）及び委員氏名： ○安藤昌幸、宮本昌彦、梨本正之、新井祥生、鈴木正利、君川尚幸	
年間の活動： 4 月 特殊健康診断、教育訓練。 5 月 RI 施設、RI 廃棄物搬出。 8 月 平成 20 年度放射性同位元素管理状況報告書提出。 9 月 RI 施設および X 線発生機器、定期点検。 10 月 特殊健康診断。 3 月 RI 施設および X 線発生機器、定期点検。 3 月 RI 施設「管理下でない放射性同位元素等の一斉点検」実施。 (RI 施設以外は、翌 4 月に学内で一斉に実施予定) 注：RI 施設の毎月度の点検、清掃、汚染・作業環境測定は、RI 利用施設運営委員会が実施した。	
問題点の提起： 放射線安全管理委員会は、新潟薬科大学の RI 利用施設及びエックス線発生装置の、施設、装置、使用者を主な管理対象とする大学の委員会である。使用者の安全性を確保することと、放射線関連事案による新潟薬科大学のブランドイメージ低下（特に近隣住民に対して）を防止することを最大の目的とし、関連する法令や学内規程を順守して管理活動を行っている。 RI 利用施設本体は、新築後の利用開始（2006 年度）から 3 年以上を経て初期トラブルはほぼ完全に解決し、安定的に運用されている。その一方、一部の装置や機器の経年劣化が問題となっており、たとえば前年度に液体シンチレーションカウンターの更新（予算規模約 900 万円）を行った。想定外の機器や施設の修繕や更新に、単年度予算方式では迅速に対応できない場合もあるため、この点は注意すべきである。 特殊健康診断における診断項目の抜け（聴力）や、管理状況報告書の提出が期限後になるなど、形式的ではあるが法令が遵守できなかった事案があり、再発防止に努めたい。 今後は、安全性を確保しつつ、RI 施設および X 線発生装置の利用を増やし、大学の教育研究への貢献を高めていくことが重要な課題であると考えている。	

平成 21 年度 委員会実績報告

委員会名	R I 利用施設運営委員会
委員長（○印）及び委員氏名： ○安藤昌幸*、宮本昌彦*、梨本正之、新井祥生、鈴木正利、君川尚幸、高久洋暁*、西田浩志*、渡辺賢一、浅田真一*、大貫敏男* *：防災委員（緊急時対応と月度の汚染・環境測定および清掃を担当）	
年間の活動： 4 月 教育訓練。 毎月度 施設内外の汚染・環境測定。 毎月度 施設清掃。 緊急時（地震あるいは火災等）の参集は、本年度はなかった。	
問題点の提起： R I（放射性同位元素）利用施設運営委員会は、新潟薬科大学の R I 利用施設の保守管理業務、教育研究業務などの遂行を目的とする大学の委員会である。放射線安全管理委員に加えて、R I 利用研究室の責任者が委員となっており、主な委員会活動は、6 名の防災委員により行われている。 防災委員は、多大な研究教育活動や他の学務に加えて本委員会活動を行っており、所属研究室の R I 適正使用の責任も負っているため、負担は少なくない。委員自らが行う R I を利用した教育研究に伴う応分の義務を負うのは当然であるが、それ以外について、委員会活動の効率化などによる負担の軽減が重要な課題であると考えている。 次年度以降、汚染・環境測定を業者に委託する予定である。委員の負担軽減のみならず、測定に使用する機器の信頼性保証（機器バリデーション）や、法に則った測定、記録、保管を確実に行うという観点からも、適切な措置と考える。	

平成 2 1 年度 委員会実績報告

委員会名	大学院入試委員会
委員長（○印）及び委員氏名： ○大野 智、 河野健司、鍋倉智裕、田辺 顕子	
年間の活動： 平成 2 2 年度大学院薬学研究科、博士(後期) 課程、学生募集要項の作成。 平成 2 2 年度大学院応用生命研究科薬科学コースの併設と学生募集要項の作成。 平成 2 2 年度大学院薬学研究科、博士(後期) 課程、入学試験、3 月 4 日実施、 4 人受験、 4 人入学。 平成 2 2 年度大学院応用生命研究科薬科学コースの新設、博士(前期) 課程、社会人臨床薬学コース。 入学試験、3 月 1 2 日実施、2 人受験、 2 人入学。	
問題点の提起： 平成 2 2 年度入試から 4 年制の学生を主にした、大学院薬学研究科、博士(前期) 課程、社会人臨床薬学コース、社会人薬学コースの学生募集は志願者が少なくなるので、4 年制の学生で大学院進学を希望する学生を如何に確保するか、また入試をどのように実施するかを検討した。その結果、平成 2 2 年度から大学院応用生命研究科に薬科学コースとしてこのコース併設した。すでに卒業した卒業生や他学部卒業生の大学院入学希望者の受験を勧めることとした。	

平成 21 年度 委員会実績報告

委員会名	産官学連携推進センター運営委員会
委員長（○印）及び委員氏名： センター長 小西 徹也（応用生命科学部） 運営委員（薬学部） 渡邊 賢一、高中 紘一郎 （応用生命科学部） 浦上 弘、平山 匡男、川田 邦明 大学知財管理アドバイザー 浦田 雄次（客員教授） 事務局 茂木 弘邦、渡辺 健太郎	
年間の活動： 1. <u>企業等からの問い合わせ対応</u> 受付件数（相談申込フォームによる）・・・10件 （内訳）個別相談会の開催（5件）、共同研究契約の締結（2件） 受託研究契約の締結（1件）、MTA契約の締結（1件） 特別研究員の受入（1件） 2. <u>共同研究プロジェクト等の推進</u> ①公的機関によるプロジェクト ・・・・4件 （内訳）（独）農業・食品産技総研機構（1件）、 （独）科学技術振興機構（2件）、新潟市（1件） ②一般企業との共同プロジェクト ・・・・4件 【プロジェクト一例（研究タイトルのみ）】 「堆肥発酵法による六価クロム還元処理を応用したコンクリートスラッジの再資源化」 「生活改善機能食品素材としてのトリフの特性の科学的実証とその応用」 「多糖類を原料とする微生物低減性を有する食品洗浄剤の開発」など 3. <u>その他の産官学連携活動</u> ①特定非営利活動法人化合物活用センターと連携を開始した。（09/07/08） 本学と法人化合物活用センターとの間で「化合物活用に関する契約」を締結した。この契約は、学内で眠っている有機化合物を多くの企業等に有効に活用してもらうことを目的に、同センターの持つデータベースに学内の有機化合物を登録し、希望のあった企業等へ提供するものである。 ②（独）科学技術振興機構知的財産戦略センターと連携を開始した。（09/08/17） 本学と JST 知的財産戦略センターとの間で「特許相談業務に係わる連携協定（確認書）」を取り交わした。この協定は、同センターの特許主任調査員が「知財啓蒙活動」「発明の発掘」「先行技術文献等調査」「特許性評価」等を通じて、本学における発明活動・特許化をサポートするものである。なお、学内研究者の単独発明のみならず、企業等との共同発	

明に対しても同様のサポートを受けることが可能である。

- ③「Healthy Kitchens in 新潟 2009 ～新潟“賢食”コンファレンス～」を開催した。
(09/11/21)

日本私立学校振興・共済事業団の補助を受けて発足した「食と健康に関する研究連携コンソーシアム」の活動として、本学（拠点校）、新潟県立大学、新潟医療福祉大学、新潟大学、新潟バイオリサーチパーク（株）が中心となって開催された。

今回は「幼児と食」がテーマに選定され、保育士や栄養士、教育学部の学生や食品関連企業の方々など、幼児の食育を担う専門家が数多く集まった。

（当日の様子は、新潟日報朝刊（09/12/12）にも掲載された。）

- ④新潟バイオリサーチパーク（株）と連携し、「品質管理者・開発担当者向け実務者講習会」を開催した。（09/11/28）

このイベントは、新潟バイオリサーチパーク（株）主催のもと、経済産業省の支援を受けて「新潟市地域バイオ活性化人材養成等事業」として実施されたものである。

当日は、食品製造業の事業高度化・高付加価値化を図ることを目的に、主に県内企業から多数の方々の参加があった。本学からは、応用生命科学部浦上教授、平山教授、小西教授等が講師として参加した。

- ⑤「広域産学交流ネットワーク in 長野」に参加した。（09/12/03）

このイベントは、長野県内の産学連携技術開発を促進すること目的として、（財）長野テクノ財団が中心となって開催された。

当日は、本学の他に東北大学、名古屋大学、東京理科大学、早稲田大学が参加し、産学連携による研究開発を目指す企業や行政、商工支援機関等の方を対象に「産学連携支援体制」（茂木産官学連携スタッフ）と「研究シーズ」（小西センター長）を発表した。

- ⑥前年度に引き続き、知的財産管理ワーキンググループを開催し、先述の3②の知的財産管理体制の在り方や発明規程等の関連ルールの見直しを精力的に開催した。

他には、新潟市産官学連携協議会への参加等、行政との定期連携を進めた。

問題点の提起：

学外からの研究相談件数の増加に伴い、迅速な対応処理を行う事が大学の社会的な評価、信用度の強化につながる所以对外的なサービス機能を充実するための研究スタッフの確保等必要な体制整備が必要と思われる。（学内体制として処理を迅速に行えないケースがみられたものの、研究スタッフの確保など必要な体制整備がとれなかった。）

今後は、本センターが研究プロジェクトや外部資金獲得の調整機関として必要な人員配置を求めていくと共に、学外から寄せられる研究シーズの照会に対応できるよう、教員の研究関係資料の蓄積を図るとともに、学内研究者（を進めなければならない。そして、学内教員）がより積極的に本センターを活用できるよう、学内外への情報発信に努めていく。

平成 21 年度 委員会実績報告

委員会名	大学入試センター試験実施委員会
委員長（○印）及び委員氏名： ○山崎幹夫（薬学部）北川幸己、中村辰之介、本多政宣、酒巻利行 （応用生命科学部）平岡昇、武内征司、鯉坂勝美、中村豊（事務局）鈴木正利、大井宰、長澤旭晃	
年間の活動： 大学入試センター試験連合会議(6/15)にて、平成21年度から新潟県立大学が新設されたことを受け、①新潟県内の区分を変更して平成20年度まで実施してきた新潟大学と本学との共同実施を廃止すること、②平成22年度大学入試センター試験からは本学と新潟県立大学は共同実施とし、新潟医療福祉大学と隔年実施することが正式決定された。 今年度は本学を試験場として新潟県立大学と共同で実施することが決定したことから、部局長会(6/26)で、①学長を責任者とした大学入試センター試験実施のための大学入試センター試験委員会を設置すること、②本学・新潟県立大学・新潟医療福祉大学の3大学で協議して協定書を作成すること等を確認した。 第1回大学入試センター試験委員会(9/2)にて大学入試センター試験委員会委員の選出について協議され、本部長を学長、副本部長を両学部長、本部委員を薬学部入試委員長ほか2名、応用生命科学部入試委員長ほか2名で構成することが了承され、以下のように構成員（試験実施本部員）を決定した。 本部長：山崎学長 副本部長：北川薬学部長、平岡応用生命科学部長 本部員：薬学部：中村(辰)入試委員長、本多入試委員、酒巻入試委員 応用生命科学部：武内入試委員長、鯉坂入試委員、中村(豊)入試委員 事務局本部員：鈴木事務部長代理、大井入試広報課長、長澤入試広報課員 新潟県立大学：2名 - 試験実施要目・監督要領・輸送要領等のマニュアルは本学会場に合わせて作成する必要があることから、その作成を本多、鯉坂、酒巻、中村（豊）、大井、長澤各委員が担当した。 - 文部科学省及び大学入試センターよりの通知で、<u>新型インフルエンザ発生に伴う対応説明会</u>が開催された。新型インフルエンザ対応のため、平成22年度センター試験の追試験日程が平成22年1月30・31に変更となり、試験場も各都道府県ごとに設置することとなった。本学もインフルエンザ様症状のある受験者への対応要領を作成し、担当者全員に配付して対応することとした。 - 試験室をB棟2階3階の4試験室、受験生総数449名と決定し、本部員25名、試験監督者及び待機監督者31名、リスニング補助10名、連絡(警備)員45名の合計111名体制で実施することとし、各業務担当者の配置についても検討を開始した。(新潟県立大学からの担当数は本部員2名、試験監督者6名、連絡(警備)員4名)	

大学入試センター試験委員会(12/10)で試験実施要目・監督要領・輸送要領等の各マニュアルについて確認を行った。また、監督者説明会等の開催日時と説明担当者を以下のように決定した。

監督者説明会：平成 21 年 12 月 25 日(金)15:30～ B101 (本多委員、大井委員)

本部員説明会：平成 22 年 1 月 6 日(水)10:00～ B203 (本多委員、大井委員)

連絡(警備)員説明会：平成 22 年 1 月 6 日(水)11:00～ (本多委員、中村(豊)委員、大井委員)

リスニングテスト説明会(リスニング予行演習を含む)：平成 22 年 1 月 13 日(水)16:00～ (本多委員)

◎ 平成 22 年度大学入試センター試験

実施日：平成 22 年 1 月 16 日(土)、17 日(日)

449 名の受験生の会場として実施したが、特別な問題もなく無事に終了することができた。

問題点の提起：

今回、本学を試験会場として初めて大学入試センター試験を実施して大きな問題点もなく無事遂行できた。次回以降に向けて全日程終了後、大学入試センター試験委員会を開催し、本部員による問題点・反省点等を協議し、担当した全教職員に試験監督業務・連絡(警備)業務・駐車場誘導業務・連絡方法・その他)に関するアンケート調査を実施した。このアンケートで寄せられた意見を集約して、次回以降の開催にあたって実施計画を作成する際の参考とすることとしている。

特に駐車場誘導等の外回りを担当した教職員に対してはアンケートだけではなく、次回に向けた意見や改善案を直接ヒアリングする会議を開催(2/10)した。

平成 21 年度 HP 委員会実績報告

委員会名	ホームページ (HP) 委員会
委員長及び委員氏名：中村辰之介、中村豊、斎藤聡	
年間の活動： 本委員会は平成 18 年度から立ち上がり、当初は HP の書き換えを業者に委託していたが、平成 20 年夏からは、薬大事務部で HP の書き換えができるようになった。 平成 21 年秋までは、毎月委員会を開催して、薬科大学 HP をより良くするための方策や、Yahoo や Google 検索の順位を監視し、下位に落ちないように、上位にのぼるよう算段した。 データの解析： (Cyber-Campus のページビュー (以下 PV) 数を除いた) ページビュー数は 07 年 4 月 6 万 8 千、08 年 4 月 10 万 4 千、09 年 4 月 17 万 7 千ページと増加傾向である。 Cyber-Campus のページビュー数も 08 年 4 月 1,826PV から 09 年 4 月 4,100PV へ増加している。	
問題点の提起： 高校生が受験のための情報を得るために用いる一番使われる場所が、各大学の HP であると言われている。HP は常に新しく、見やすく、内容を充実してゆかなければならない。そのためには、現在の人的資源では不十分である。来年から、HP 委員会は大学広報委員会に吸収され、新たな切り口でより良い HP にしてゆく必要がある。	

プロジェクト実績報告

平成21年度 プロジェクト実績報告

プロジェクト名	教員の教育・研究活動向上のための外部評価制度の改善
プロジェクト統括責任者（○印）及びプロジェクト参加教員氏名： ○ 長友 孝文	
平成21年度の実績概要： 本学薬学部では、外部評価委員による薬学部教員の教育・研究活動に対する外部評価制度を平成18年度からスタートさせた。この外部評価制度では、毎年作成する教員の教育・研究活動に関する自己点検・評価表をもとにした個人評価とともに、外部評価委員に本学を訪問していただき、薬学部の活動状況に対してご意見・コメントをいただくこととしている。当年度は以下のように例年とスタイルを変更し、2月23日に外部評価を実施した。 ・薬学部全教員が参加して、主要委員会の活動報告と質疑応答をパネルディスカッション形式で行った。 ・薬学部各研究室の研究概要のポスター発表を兼ねて懇親会を行い、外部評価委員と本学教員（特に若手教員）とのフリートーキングの場とした。 ＜平成21年度外部評価＞ 日時：平成22年2月23日（火） 14:00～ 場所：臨床大講義室（CB-201）およびカフェテリア 外部評価委員： 廣部 雅昭先生（静岡県学術教育政策顧問） 松木 則夫先生（東京大学薬学研究科教授） 本多 利雄先生（星薬科大学教授） 第1部：パネルディスカッション「本学薬学部の現状と将来への展望」 ～主要な委員会からのプレゼンテーションと総合討論～ 第2部：ポスター掲示による各研究室の研究・教育に関する取組紹介 当年度の外部評価については、「平成21年度 外部評価委員による新潟薬科大学薬学部自己点検・評価表」として、平成22年6月に冊子として纏めた。	
プロジェクト期間での実施総括 第三者による外部評価制度が薬学部を導入されて4年が経過した。教員の間でも外部評価の重要性、必要性の認識は定着してきたように思われる。 平成21年度の外部評価では、従来のスタイルを変更して薬学部全教員が参加するパネルディスカッション方式を採用した。主要な委員会からの活動報告が総括的にプレゼンされたこともあり、若手の教員（特に助手層）には委員会（委員長）の考え方がよくわかったと好評であった。外部評価のやり方については、教員の意見を聴取しながら、今後も全教員が参加する方式をとりたいと考えている。また、評価に関してどの程度を公開するか、HPへのアップも含めて今後の健康課題としたい。 外部評価で指摘された項目、さらに「自己評価21」の自己点検・評価過程で抽出されてきた項目を、短期・中期・長期での改善計画として整理して教員に示し、本学薬学部の改善・改良に努めたい。 （文責：北川幸己）	

平成 21 年度 プロジェクト実績報告

プロジェクト名	教員による自己プレゼンテーションによる評価と FD の実施
プロジェクト統括責任者（○印）及びプロジェクト参加教員氏名： ◎上野和行	
平成 21 年度の実績概要： 平成 21 年度は教員の自己プレゼンテーションによる評価と FD の実施に関しては年度末の 3 月に実施した。主に教育における自身の考え方（授業、試験、実習、また配属学生など）、取り組みなどの紹介、また研究に関する取り組みなどを熱く語ってもらった。同時に参加教員（約 30 名）との討論を実施した。教員 1 名あたりプレゼンテーション 30 分、討論 10 分で実施した。その詳細は以下に示す。 1 6 年制薬学部教育と研究への取り組み in F506b 2 「大学の自治」と「理事会」 3 3 年間の FD 活動報告と教育・研究の今後 本プレゼンテーションにて他の教員の考え方などが理解でき、自身の FD に役立つという意見があった。また 3 年間の活動報告と過去のプレゼンテーションの評価としてのアンケート調査などを整理し、発表された。 講演後の討論でも種々の意見が交わされ、有意義な講演であった。本講演会を通じて FD について色々討論できたと考える。 尚、本プロジェクトにおける 3 年間の活動報告を作成した。 「教員による自己プレゼンテーションによる評価と FD の実施」 文部科学省選定事業「教育・学習方法等改善支援」 平成 19～21 年度成果報告書 平成 22 年 5 月 25 日	

プロジェクト期間での実施総括（プロジェクト終了の場合）

平成 22 年度の実施計画概要（プロジェクト継続の場合）

実施総括は上記の成果報告書にまとめた。

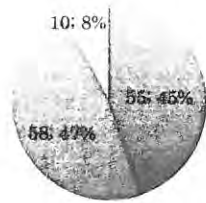
平成 22 年度は本プロジェクトに関する実施の予定はない。

平成 21 年度 プロジェクト実績報告

プロジェクト名	文部科学省 教育・学習方法等改善支援事業 効果的な理科・教養教育の充実・改善への取り組み ――中高等学校と連携することによる実践的理科学研究授業――																																					
プロジェクト統括責任者（○印）及びプロジェクト参加教員氏名：																																						
○ 尾崎 昌宣、白崎 仁、大貫 敏男、北川 幸己																																						
平成 21 年度の実績概要：																																						
文部科学省「教育・学習方法等改善支援事業 効果的な理科・教養教育の充実・改善への取り組み―― 中高等学校と連携することによる実践的理科学研究授業――」として本学学生と近隣の高校生・高校教諭を対象とした体験型実習「体のしくみを知る」を平成 22 年 3 月 14、15 日 10：00～16：00、本学 H-201 実習室に於いて実施した。																																						
参加校および参加者の内訳は以下の通りである。（2日間の延数）																																						
新潟南高等学校、新潟中央高校、新潟高校、新潟清心女子高等学校、長岡高等学校、長岡大手高等学校、長岡向陵高等学校、新津高等学校、五泉高等学校、新津高等学校、新津南高等学校、阿賀野高等学校、新潟明訓高等学校（計13校）																																						
高校生 137 名、高校教諭 7 名、本学 3、4 年生 20 名、本学教員 8 名、保健師 1 名、広報課 2 名、学部長 1 名 合計176名																																						
内容は、オリエンテーション・実験動物の倫理・意義やラットの基礎知識等の解説を行った後、ラットを解剖し、内臓配置・器官相互間連結の観察、レポート作成、発表、質疑・応答を行った。終了後、アンケートを実施し結果は以下のとおりであった。																																						
1. アンケート項目と結果（人数；％）																																						
この実習に参加を決めた理由	実習に対する興味	実習の内容の適切さ																																				
■自分できめた ■友人にすすめられた ■先生に進められた	■持った ■普通 ■なかった	■良かった ■普通 ■難しい																																				
<table border="1"><thead><tr><th>理由</th><th>人数</th><th>％</th></tr></thead><tbody><tr><td>自分できめた</td><td>28</td><td>24%</td></tr><tr><td>友人にすすめられた</td><td>71</td><td>61%</td></tr><tr><td>先生に進められた</td><td>15</td><td>15%</td></tr></tbody></table>	理由	人数	％	自分できめた	28	24%	友人にすすめられた	71	61%	先生に進められた	15	15%	<table border="1"><thead><tr><th>興味</th><th>人数</th><th>％</th></tr></thead><tbody><tr><td>持った</td><td>7</td><td>6%</td></tr><tr><td>普通</td><td>1</td><td>1%</td></tr><tr><td>なかった</td><td>168</td><td>93%</td></tr></tbody></table>	興味	人数	％	持った	7	6%	普通	1	1%	なかった	168	93%	<table border="1"><thead><tr><th>適切さ</th><th>人数</th><th>％</th></tr></thead><tbody><tr><td>良かった</td><td>10</td><td>8%</td></tr><tr><td>普通</td><td>3</td><td>3%</td></tr><tr><td>難しい</td><td>163</td><td>91%</td></tr></tbody></table>	適切さ	人数	％	良かった	10	8%	普通	3	3%	難しい	163	91%
理由	人数	％																																				
自分できめた	28	24%																																				
友人にすすめられた	71	61%																																				
先生に進められた	15	15%																																				
興味	人数	％																																				
持った	7	6%																																				
普通	1	1%																																				
なかった	168	93%																																				
適切さ	人数	％																																				
良かった	10	8%																																				
普通	3	3%																																				
難しい	163	91%																																				

実習課題の難易度

■できた ■普通 ■難しい



指導者について

■適切だった ■普通 ■適切でなかった



実習内容の量について

■多すぎる ■丁度良い ■少ない



実習グループの人数の適切さ

■多すぎる ■丁度良い ■少ない

1: 1% 0: 0%



実習した仲間とのコミュニケーション

■できた ■普通 ■できなかった

2: 2%



実習時間の適切さ

■長すぎる ■丁度良い ■短い

7: 6% 9: 7%



次回への参加意欲

■是非参加したい ■参加してもよい ■参加したくない

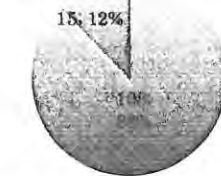
7: 6%



全体評価

■良かった ■普通 ■悪かった

0: 0%



持ち帰り教材への評価

■良い ■普通 ■悪い

3: 3%



2. 今後実施してほしいテーマ (原文通り)

- ・環境問題(海の保護、正しいエコ) ・筋肉 ・脳機能からみる精神的作用など
- ・脳の解剖がやりたい。 ・時間がかかるかもしれないが、脳の解体もやってみたい
- ・口内の解剖。・骨格が見たいです。 ・顕微鏡を用いて同様の実験をしたい
- ・哺乳類以外の動物の解剖、特に両生類の幼体と成体の体の差について学びたい
- ・薬学系のテーマ ・眼 ・骨格 ・脳の観察 ・注射での麻酔 ・エーテル麻酔の原理。
- ・薬理的な…薬の作用についての講演会があったら行ってみたい ・動いている各内臓を見る。
- ・菌、細菌テーマ 遺伝子関係の実験 ・PCR等 ・目の解剖
- ・組織の細胞観察 ・人骨を調べたいです ・小脳の詳しい実習
- ・薬を使ったラットの行動観察のようなことをしてみたいです ・他の動物でもみてみたい

3. 改善点など (原文通り)

- ・頭だけ開きやすく処理してあるとよいと思いました。
- ・エーテルの効果時間が短いです。
- ・空気の換気をもう少ししてもらいたい。
- ・ホルマリンで固まっていないものもあったので、そこを点検してほしいです。
- ・とても有意義でした。ただ、動物実験の意義をもう少し説明すべきだと思います。つまり、楽しいだけではだめだと思います。

- ・内容が多く、時間内で消化するのは難しかった。取り上げる内容系を少なくして、スケッチなどの時間を増やしても良かったのではと思う。
- ・体の構造などがよくわかりました。
- ・もっと解剖の時間があってほしかった。実習以外の話を聞きたかった。
- ・もっと詳しく、わかりやすく、デモをしてほしいです。

4. 感想など（原文通り）

- ・とても充実していた。
- ・楽しかったです。
- ・満足ですとても
- ・勉強になりました。
- ・興味深く、大変勉強になりました。ありがとうございました
- ・とても良い体験ができたのでよかったです
- ・とても楽しかったです。将来の参考にします。
- ・指導が上手でわかりやすかったです。
- ・いろんな臓器が見れてよかった。
- ・脳が見れてよかったです。楽しかった！
- ・生きている動物の解剖を初めてしました。良い経験でした。
- ・優しく、丁寧に教えていただいたので、とてもよい学習ができたと思います。
- ・ネズミが起きたのはびっくりしたけど、おもしろい実習でした。
- ・いつも図や写真でしか見れないものが実際に見れて良かった。
- ・大学の方がとても親切に教えてくれたのでやりやすかったです。
- ・大学の方々が優しく教えてくださり、助かりました。ありがとうございました。
- ・すごく楽しかったです。先生とかお姉さんが優しくかったです。おもしろくて、話しやすかったです。
- ・今日は、とてもたくさんの知識がついて、うれしかったです。
- ・体の仕組みを実際に見れて、すごく参考になりました。滅多にできないことなので参加してよかったです。

アンケート結果および考察：

実習参加のきっかけは、自分で決めたと回答した生徒が 71 人、61%の回答は予想以上に高い。先生に進められた 28 人 24%が 2 位の回答であるが、最終的な判断は自分で決めたと解釈するのが妥当であろう。また、実習に対する興味へは、9 割以上が興味を持って参加していた。

実習内容の適切さについては、9 割の生徒が良とし、難しいと答えたのは 3 人 3 %であったが、課題の難易度については、できた・普通が共に約 5 割であり、課題内容は適切であったが技術的には難しいと感じていると思われる。指導者については、8 割以上の生徒が適切だったと回答している。また、実習内容の量については、9 割の生徒が適当との回答であった。

そして、実習の班人数については、99 %の生徒が適当と回答し、実習班のコミュニケーションについては、7 割の生徒ができたと回答、普通と併せて 98%である。量、班人数、コミュニケーションは適切であると考ええる。

実習時間については、9 割弱の生徒が適当とし、長い・短いとの回答は夫々約 7 %程度であった。次回への参加意欲は、積極的参加、参加してもよい との回答はともに 47 %であった。併せて 94%の回答は高評価であると考ええる。

持ち帰り教材への評価は、悪いが 3%であった。しかし、持ち帰り教材配布前の評価であり、再度評価する必要がある。

全体評価では、良かったと回答した生徒は88%であり、高評価と言える。

平成 22 年度の実施計画概要：

本プロジェクトは、文部科学省より教育改善支援の補助を受け3年間実施された。

大学生の入学後の理系科目の学力低下が指摘されているが、医学・薬学などの専門科目への導入という観点からも高校生への理科教育の重要性という観点から開始された。特に大学では学生達の科学的資質や探究心を養うと共に内容に関する理解が求められるが、これに対応する素養は高校生の時代から養うことが必要である。本講座では、高校生の科学に対する深い理解と興味を引き出す教育方法の効果的な充実・改善を図ると同時に、大学生を参加させることにより大学の教養教育への導入教育の一部として高等学校教諭と大学教員が連携し、本事業の活用法を模索することを企図とした。

テーマの選定にあたっては、内容は「解剖実習」を企画した。近年、高等学校では「体の構造および機能」を知るための解剖実習が行われなくなり教科書の上での平面図を用いた学習のみで、生体器官・臓器などの立体的配置や機能を知る機会がない。また、生物に対する倫理を学ぶ機会もない。この理由は、高等学校では動物を飼育する設備が乏しく、また教諭の時間的・能力的負担が大きいことによるものとおもわれる。そこで、本大学では実験動物を保持・使用する施設を有し研究に実験動物を使用するので、高校生および高等学校教諭にその機会を提供出来ることから本講座・テーマを企画した。本テーマは「体の形態や機能」を中心に実施するが、解剖実習自体が問題点を抽出しにくい「生体の不思議」という部分が多いため、疑問点の解決に至るには難しい面もある。また、倫理面をみると、解剖実習を実際に自分で行った後に改めてその必要性を認識する事も有る。しかし、高校生の周囲の教育環境を見渡すとき、これらの機会はほとんどないため上記の理由で本企画の立案は非常に有意義なものであると考えられた。また、この実習に大学生が参加することにより、大学生および高校生の両者に対する教育方法について連携した理科教育及び大学教養教育の充実・工夫・改善への理解を深め、生物の生命倫理についても考える取組みとしても有用である。特に本企画では、大学生が高校生に説明・解説を加えるピアサポートの形態をとり、大学生の勉学意欲を高めるとともに、高校生は教諭・教員よりも年代の近い大学生に気軽に質問できるため（アンケート参照）、共に考え即座に問題発見、解決に繋がるとおもわれた。

初年度は当初の予想した以上の参加者があり毎年参加者は増加し、3年目には137名（初年度の約2倍）の高校生が参加し、大学生、高等学校教諭、大学教員を合わせて延べ総勢176名が参加した。このため実習施設および高校生に対応する教員数の割合を考慮し、2日間（同一企画を2回）にわたり実施した。この参加者の増加は、高等学校では実施できないが、大学が施設や教育カリキュラムの一部を提供し、高等学校教諭と大学教員とが連携して高校生徒・大学生教育に関わるので教育上からも有用であることや、参加高校生の友人・後輩や高等学校教諭間の情報交換などにより、各高等学校にとって本企画の有用性が年々認識されてきたことが増加に繋がったと考える。

文部科学省の支援を受けた本プロジェクトは今回で終了するが、来年度も引き続き、本学で実施する予定で、実施にあたっては、高校生・学生がさらに考え、討論を重ねる場を提供し、合わせて高等学校教諭と大学教員間の情報を交換することにより、生徒・学生の実施内容の理解を深めると同時に理科教育指導方法・内容について考える場になるよう努めたい。また、テーマについては、アンケートの中から実施可能なものを順次取り入れていきたい。

平成 21 年度 プロジェクト実績報告

プロジェクト名	高度コミュニケーション能力を持った薬剤師の育成を目的とした教育プログラム
プロジェクト統括責任者（○印）及びプロジェクト参加教員氏名： ○武久智一 杉原多公通	
平成 21 年度の実績概要： 本プロジェクトは医療現場で必要とされるコミュニケーション能力の涵養を目的とした 3 ヶ年プロジェクトである。最終年にあたる平成 21 年度においては、以下の 3 点を中心に取り組んだ。 （1）言語課題集の使用及び改良 本プロジェクト初年度（平成 19 年度）において準備段階として作成した言語運用能力の涵養を目的とした課題集を、昨年度に引き続き、本年度も「外国語 A I」などの少人数形式の授業において使用した。この課題集については、本プロジェクト終了後も継続的に使用する予定である。 （2）学生間でのロールプレーによる学習 2 年生または 3 年生を対象として、「医療人としての心構え（倫理とコミュニケーションⅡ）」や「患者との信頼関係（倫理とコミュニケーションⅢ）」の授業でコミュニケーション・スキルの理論に関する講義と学生間でのロールプレーを主とした教育を行った。 （3）標準模擬患者とのロールプレーによる学習 本プロジェクト最終年度にあたる本年度においては、（1）・（2）を踏まえた上で、3 年次実習科目「薬物治療学実習」の一環として標準模擬患者とのロールプレーによる学習を実施し、実践的な医療コミュニケーション教育を行った。	
プロジェクト期間での実施総括（プロジェクト終了の場合） 平成 22 年度の実施計画概要（プロジェクト継続の場合） 平成 21 年度をもって本プロジェクトは終了した。本プロジェクトにおいて実施した教育プログラムの内容は何らかの形で今後も継続的に実施していくことが望ましいのは当然のことであるが、本年度（平成 22 年度）から 6 年制薬学部における臨床実務実習が始まったことを鑑みたとき、本プロジェクトの教育プログラムは、臨床実務実習をより有意義なものにするための準備教育となると考える。	

平成21年度 プロジェクト実績報告

プロジェクト名	アクティブラーニング手法を用いた アドバンスト薬学教育プログラム
プロジェクト統括責任者（○印）及びプロジェクト参加教員氏名：	
○杉原多公通 参加教員：尾崎昌宣，高中紘一郎，土橋洋史，本澤忍，高津徳行，浅田真一	
平成21年度の実績概要：	
学生間、あるいは、教員からの質問や発問を多用して、学生の「知識に対する好奇心」を引き出し、少人数討論（SGD：Small Group Discussion）を通して各人が回答を導き出す問題立脚型授業の導入を行い、学生に『能動的学習』方法を修得させることを目的としている。 今年度は『化学構造と薬理作用』『構造から見る有機分子』の2つの演習授業、および『薬品化学実習Ⅰ』の実習の中で行った演習授業で、アドバンスト薬学教育に位置付けられる内容に関するSGDを行った。①教員からの質問や学生による発問によって問題提起を行い、②学生によるSGDを通して回答方針と調査分担を決め、③調査・思考ののち各人の回答を持ち寄り、④SGDによってお互いの理解度・習得度を高め、ループの意見としてまとめ⑤発表した。 内容的に難したためか教員による質問の意味が十分に伝わっていなかったり、あるいは、発問している学生自体も質問のポイントを理解していなかったりして、担当教員が意図しているSGDのスタートラインに立つこと自体に困難を極める場面が幾つか見受けられた。さらにSGDの際にファシリテートをしないとどこかのホームページをコピー＆ペーストしたような内容になってしまうが、ファシリテーションが教授することになってしまう教員も多々見受けられ、教員を対象としたファシリテーションの仕方に関する勉強会を開催する必要性を感じた。SGDをしながら学んでゆく形態は学生にとっては新鮮なものようで、「面白かった」等の好評価が聞かれた。	
プロジェクト期間での実施総括：	
アドバンスト薬学教育に位置付けられる内容は主に高学年で開講する授業で取り扱うことになっている。内容に何する学生の理解を深めるためにはSGDを主体とした授業形態が望ましい。低中学年を対象とする授業の中にアドバンスト薬学教育に位置付けられる内容を含ませ、その部分の授業に関してSGDを主体とした形態で進めてきた。高学年教育のモデルやトライアルとしては十分な成果を上げたと考えている。 アクティブラーニングを上手く進めるためには、題材の選び方やファシリテーションの仕方が重要であり、今後、教員を対象としたこれらに関する教育を行う機会を設ける必要がある。	

平成 21 年度 プロジェクト実績報告

プロジェクト名	介護老人保健施設への早期体験実習および報告検討会
プロジェクト統括責任者（○印）及びプロジェクト参加教員氏名：	
○影向範昭、朝倉俊成、影山美穂 引率協力者：飯村菜穂子、笹木睦子、佐藤浩二、関谷倫子、関川由美	
平成 21 年度の実績概要：	
1. 実習目的 法律上、入所者 300 人未満の介護老人保健施設には薬剤師は不要となっている。この施設内における医薬品管理の現実を知り、今後薬剤師としてどの様に対処・アクションしていかなければならないのかを考える。さらに入所者や施設利用者の皆さんとのふれあいを通して、高齢者や認知機能の低下している人とのコミュニケーションの取り方について体験をする。学生へは下記の点に視点をおいて体験実習するように説明した。 ①介護老人保健施設についてよく理解する。 ②介護保険の制度について深く理解する。 ③施設における薬剤師の関わり、薬剤の保管の状況を見学する。 ④施設の利用者さんとの「ふれあい体験」を通して命の尊さを実感する。 2. 実習学生 厚生労働省への申請時点では、5 名ずつの 15 名で実施する予定であったが、学生および教員から全員が体験した方がよいという評価になり、本年度も昨年度に引き続き薬学部 2 年生の全員 182 名が必須として参加した。 本来は 20 班に分けて実施する計画を立てたが、新型インフルエンザ流行があり実施日程が変更されたことから、途中で班割を組み直して、最終的に学生を 19 班に分けて平成 21 年 10 月 5 日、6 日、7 日、20 日、27 日の 5 日間のうち、いずれかの施設で 1 日の体験実習を実施した。 3. 実習施設および引率者 実習施設は昨年度と同じ下記の 4 施設にお願いし、当教室教員 3 名および学内の他の研究室教員 5 名にお願いして引率していただき実施した。 ①健進館 ②おぎの里 ③秋葉の郷 ④愛宕の里	

4. 発表

体験実習の報告会は平成 22 年 1 月 13 日に開催した。2 年生全員の他に、引率教員、臨床実務教育委員など教員にも発表会への参加を募った。本年度もパワーポイントを使用しての発表をしてもらった。実際の施設内での写真も多く入った発表であった。学生からの質問も活発にでて充実した発表会を開催することができた。

さらに、本年度はプロジェクトとしては最終年ということで、発表資料をまとめて小冊子を作成して学内に配布した。

プロジェクト期間での実施総括（プロジェクト終了の場合）

平成 22 年度の実施計画概要（プロジェクト継続の場合）

本プロジェクトは平成 19～21 年度の 3 年間で実施し、平成 21 年度の実施をもって終了した。

ほとんどの介護老人保健施設では、法律上、薬剤師は不要となっているため、常勤する薬剤師はいない現状がある。しかし高齢な入所者は医薬品を使用している率が非常に高いので、医薬品の管理、入所者への配薬・服薬確認などに薬剤師が活躍できる場面が多々あることが想像できる。

3 年間の本プロジェクトを実施して、学生には介護老人保健施設においても薬剤師の果たすべき仕事が多くある事実を認識してもらった。また、認知機能の低下している入所者さんとのふれあいを通じてコミュニケーションの取り方の難しさを体験してもらった。これらは今後の薬剤師が取り組まなければならない事項の一つである。

学生の発表を聞いていて、この体験実習で目的としたことは十分に達せられたと感じる。参加した学生のみでなく、引率した教員からも非常に勉強になったとの感想を得ることができた。今回のプロジェクトを貴重な経験として、さらに介護方面について、学生に認識・興味を持たせるような教育を充実させていかなければならない。

平成 21 年度 プロジェクト実績報告

プロジェクト名	不自由体験を通じた医療人としての人間性涵養への取組
プロジェクト統括責任者（○印）及びプロジェクト参加教員氏名：	
○杉原多公通 参加教員：影向範昭、朝倉俊成、影山美穂、杉原多公通	
平成 21 年度の実績概要：	
身体的に不自由を抱えている人達は、健常人にはわからない様々な悩みや問題を抱えている。身体的に不自由を抱えている人達に配慮した行動や思い遣りの心を持つことは医療人にとって必要不可欠なことではあるが、実体験がないとなかなか現実味を帯びない。そこで、将来薬剤師となる学生の教育プログラムの中に不自由体験を盛り込み、身体的弱者の悩みや問題に配慮した応対が行える人材の育成を目的としている。 今年度は、1 年生を対象として参加希望者を募り、車椅子体験、高齢者体験、妊婦体験を行った。また、4 年次に開講した臨床実務実習事前学習の授業の中でも不自由体験を取り入れている。1 年生の参加希望者は 20 名と少なかったが、車椅子や松葉杖の使い方を説明した後、2 人 1 組となり車椅子、松葉杖、妊婦体験用ベスト、白内障・視野狭窄体験用アイマスク、高齢者体験用サポーターをつけた学生とその補助者役を交代でこなし、構内を散策した。不自由体験の後、2 つのグループに分かれ体験に関する意見交換会を行った。参加した学生にとって貴重な体験となったようである。また、4 年生を対象とした臨床実務実習事前学習でも同様の内容を行った。	
平成 22 年度の実施計画概要：	
※今年度と同様に参加者を募り、不自由体験を行う。 ※指導協力教員の育成に向けた施策を考案し、実施する予定である。	

平成21年度 プロジェクト実績報告

プロジェクト名	時間外開館による学生の学習、外部利用者の生涯学習、研究支援と蔵書点検
プロジェクト統括責任者（○印）及びプロジェクト参加教員氏名： ○白鳥 寛	
平成21年度の実績概要： 平成21年度の日曜、祝祭日の時間外開館は12日で、平成20年度より若干減ったが、これは、平成21年度は薬学部の6年制がスタートしてから卒業生がでない初めての年度にあたり、薬剤師国家試験にそなえて学習する利用者がほとんどいないため、2月の日曜、祝祭日開館を行わなかったためである。しかし、両学部生の前期、後期試験前には日曜、祝祭日も開館し、学生の学習の支援を行った。 平成21年度の外部利用者は93人で、平成20年度の159人から比較すると減ってはいるが、利用者の内容をみると、薬剤師や看護科の学生、食品関連企業の方なども利用しており、図書館の蔵書内容に関連した職種、学生の利用があり、学習の支援となっている。今後は、医学薬学や食物など一般の人たちにも興味のある健康に関する特徴的な分野を生かし、地域住民が利用しやすいように、外部にむけてのアピールをもっとする必要がある。 平成21年度の蔵書点検は、3月の春期長期休暇中に閲覧室内の図書約48000冊に対して行った。また、各研究室から、内容旧化等の理由で不要となった図書を回収し、除籍あるいは図書館への移管を行った。その結果、図書178冊、雑誌3冊を除籍した。蔵書点検中に、図書に貼付しているICラベルの故障を発見することができ、順次、貼りかえることができた。 なお、時間外開館および蔵書点検には、学生アルバイトを活用した。	
プロジェクト期間での実施総括（プロジェクト終了の場合） 平成22年度の実施計画概要（プロジェクト継続の場合） 学生の学習、外部利用者の学習や研究支援のため、今後も平日の夜間および土曜日の時間外開館を行う。また、学生の前期、後期試験期間の日曜、祝祭日の開館も行う。 蔵書点検は、8月、3月の長期休業期間に行う。	

平成 21 年度 プロジェクト実績報告

プロジェクト名	効率的な学習を促す情報収集能力向上プログラム
プロジェクト統括責任者（○印）及びプロジェクト参加教員氏名：	
○杉原多公通 参加教員：杉原多公通，本澤忍，浅田真一	
平成 21 年度の実績概要：	
ホームページ（HP）には、学習を補助する情報が多数掲載されている。しかし、ある情報を得ようと検索しても、的確な情報は容易に得られない。HP 制作者が書き込んだキーワードと検索者である学習者が考えるものが微妙にずれていることが主な原因である。学生が作成した学位論文や総説を HP 上で公開可能なデジタル化する過程を経て、HP 制作者の意図を理解し、学習効率の向上につながる検索能力を身につけることを目的としている。 今年度は「卒業論文のインターネット公開を通じた的確なキーワード抽出能力・検索能力の向上プログラム」を実施した。オープン・ソースとして入手可能な「D-Space」というリポジトリ・サーバー用プログラム（ソフト）をもとに、丸新システム株式会社に依頼してキーワード入力項目と入力したキーワードのヒット率、全文検索によるヒット率を解析する部分を追築し、キーワード抽出能力・検索能力の検証システムとした。また、卒業研究Ⅰで作成した論文（総説）の公開を前提として、著作物の公開に向けた使用許諾を学生から得た。デジタルファイルとして提出した論文をリポジトリ・サーバーへ収載したが、ソフトの開発が遅れ、キーワード入力と検索結果の解析には至っていない。 前年度行った、「検索エンジンでヒットするような仕組みを組み込み、研究室のホームページ上でポスター発表原稿を公開」する試みは、検索のヒット率からみると、各人の発表ごとに選んだ 10～20 のキーワードのうち約 6 割が 7 割程度のヒット率を示していたが、残り約 4 割は 2 割以下のヒット率であった。このデータをもとに、キーワードの変更を学生に促している。	
平成 22 年度の実施計画概要：	
※「卒業論文の公開を通じた的確なキーワード抽出能力・検索能力の向上プログラム」の実施 ※検索結果の解析とより良いキーワード抽出への取組み	

平成 21 年度 プロジェクト実績報告

プロジェクト名	地域共同研究支援
プロジェクト統括責任者（○印）及びプロジェクト参加教員氏名： ○小宮山忠純、皆川信子、宇田 裕、安藤昌幸、長友孝文、石黒正路、米田照代、北川幸己、浅田真一、杉原多公通、本澤 忍、上野和行、福本恭子、若林広行、尾崎昌宣、飯村菜穂子、酒巻利行、佐藤浩二、星名賢之助、鍋倉智裕、中村辰之介、福原正博、山口利男、大和 進、田辺顕子、中川沙織。	
平成 21 年度の実績概要： 地域共同研究支援のプロジェクトは、以前の共同研究を引き継ぐ形で平成 18 年度から『分子認識・分子機能を基盤とした創薬・薬物治療研究』を表題に 5 年間の予定で実施している。その研究目的は次のとおりである。分子認識・分子機能を基盤として、疾病に対する予防や治療への新規医薬品の創製と新たな薬物療法の開発を目的とし、効果的で副作用の少ない医薬品の創製と薬物治療の推進を図るもので次の三つを主な課題とする。①疾病・治療にかかわる分子の構造と機能について分子レベルでの解明と創薬。②分子認識・分子機能に基づく創薬標的分子の設計及び化学的合成法の開発。③効果的な薬物治療のための製剤設計、薬物動態解析及び薬物治療。 平成 21 年度は参加研究者自身が行う研究の他に下記の作業・事業を実施した。 1) 「平成 21 年度研究経費計画表」の作成。 2) 「平成 20 年度研究成果報告書」の作成。 報告書は平成 20 年度の研究成果報告や学会誌発表 39 報、学会発表 58 報、出版物・総説等 11 本の件数及び論文別刷について掲載し、A4 版 296 頁から成る。 3) 第 2 回「地域共同研究支援研究発表会」。学内において実施し、盛会であった。 2009 年 8 月 26 日（水）B302、B303 講義室、カフェテリア。世話人：杉原、鍋倉。 口頭発表：小宮山、尾崎。ポスター発表：15 演題	
プロジェクト期間での実施総括（プロジェクト終了の場合） 私学助成の「地域共同研究支援」補助項目は平成 18 年から平成 22 年度の 5 年計画であったが、平成 22 年度は「大学間連携等の推進」へと見直しがおこなわれて、誠に残念ながら突然の廃止となってしまった。本プロジェクトは、医薬について研究をおこなう重要なプロジェクトで、本学教員の研究にとって研究を進める上で経済的側面からの助けともなっていたが、未完のまま終了せざるを得なくなってしまった。プロジェクトは、年を重ねる毎に充実して来ており、また、テーマをお互いにクロスオーバーさせて研究を進めておられる先生もおられた。研究の成果は、それぞれの研究単位で相当充実し、蓄積されつつあったので、プロジェクト形成の意味・成果は十分あったと考えられる。「研究成果報告書」は毎年度作成した。 平成 22 年度は、「平成 21 年度研究成果報告書」の作成を行い、できれば研究成果の公開・活用等社会還元につとめるため、「研究成果報告書を図書館に置く」、「電子ファイルを本学ホームページ及び図書館に置く」などの作業を計画している。	

平成21年度 自己点検・評価表

2010年 発行

編集 新潟薬科大学薬学部自己点検・評価委員会
新潟薬科大学大学院自己点検・評価委員会
